
ブルトンの騎士候補生

英國孝太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルトンの騎士候補生

【Zコード】

Z5367V

【作者名】

英國孝太郎

【あらすじ】

孤児から騎士へ、騎士から名門貴族へと成り上がる聖なる騎士物語。ヨーロッパ最後の騎士の国「フランスノブルターニュ地方」でのロマンス。

騎士団の社交界アッパータウンで、騎士候補生となつた主人公が、あの『アーサー王と円卓の騎士』の末裔たちと織りなす剣と魔法の聖剣伝説。騎士の宴あり、魔法あり。

13歳の少女は騎士社会の存在を根底から搖るがす、黒き陰謀の渦

に巻き込まれる。

【改稿中】プロローグ

【東日本大震災で被災された皆様へ】

このたびの東日本大震災において、
お亡くなりになられた方々に対しまして心よりお悔やみ申し上げま
すとともに、
被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。

現在、プロローグは改稿中のためもうしばらくお待ちください。

【語句説明】

MMORPG（マッチシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロ
ール・ブレイング・ゲーム）

一般的に「多人数同時参加型オンラインRPG」などと訳され、オ
ンラインゲームの一種でコンピューターRPGをモチーフとしたも
のを指す。

（Wikipedia フリー百科事典引用）

第1話 星読みの予言【1】&1t・推敲編>；

第1話

ビクッと鳥肌が立つとともに、ナオミはわれに返つた。

（今さつき自分は一瞬だけ夢をみていた、また新渡勇人（一ト・ヨウジン）といつ少年の夢を ）

今はまわりをみなくては。現実逃避をしちゃいけない。でもこの非現実的な光景を、どうやつて受け入れたらいのだらう。居候先の宿主の命令で、近くの森に水汲みに来ていた少女は、自分にそう言い聞かせた。

見上げる程の巨木に囲まれて、黒髪のボブカットが激しく揺れる。少女の銀の丸ぶち眼鏡には、この森では見慣れない異形な生き物が映っている。太古から生い茂る原始林のなかで白くて大きな何か。あれは白狼だ、まるで雪のように純白で美しい。

霧に包まれた森から逃げ出そうとする者に容赦なく鋭い牙が襲いかかる。獣、いや姿形からいっても魔獸と表現したほうが無難だ。

なんたつて大人を丸呑みできる程の巨体なんだから。

夜泣きふくろうの鳴き声に紛れて太い木の枝をバギッバギッ！と碎く音、ナオミの耳には悲鳴と嫌な音が聞こえた。ヒトを味わうベチャグチャツという音を想像しただけでも身の毛がよだつ。

季節は十一月。吐く息は凍てつく寒さから白く濁り、外気を吸い込めば肺がにわかに痛い。きしゃな体のナオミにとつて、色褪せたデニムのジーンズに糸のほつれたウールのカーディガン。そして毛糸のセーターと汚れた木綿のエプロンだけでは、真冬の早朝の寒さに身も心もとても耐えられない。

濃霧に包まれた大森林では、太陽の木漏れ日など日にあることはない。いつも早朝に水汲みにいく時間からして、おやじく

今は 午前五時を少しまわったぐらいだらう。

それでもこの森は夜と変わらない程の漆黒の闇に包まれている。うつそうと生い茂る葦が、彼女のデニムのジーンズにまとわりつく。いかにも逃がさないぞと意志を持つているようだ。

ナオミの鼻に血のにおいがツーンツと届く。水汲みにきていた人間に数匹の獣が群がっている。身体の上に小山ができる、少し離れたところに泉ですれ違った男の首だけが、身体から分離して不思議そうにこちらを見つめていた。

ナオミは心が麻痺し、現実を呑みこめないでいる。（このカンペールの森に、こんな魔獣が生息しているなんて今まで耳にしたことない）少女は逃げたくても、彼女の町へ通じている道を巨体が防いでいるため、逃げられない。

前には巨大な白狼が七匹。後ろには五匹、うち四匹はヒトを喰っている。ナオミは恐怖のあまり木陰のなかに身を潜め、前かがみに震えながらギュッと小さくなつた。パキッと少女が踏んだ小枝に白い狼はピクッと耳をたてた。

ガルルルッ！と狼どもの唸り声が聞こえ、白い吐息が見えた。ペチャツと涎が聞こえる。狼と自分を隔ててているのはこの木陰だけだ。身体を動かせばパキッとまた小枝を踏んだ音がした。一瞬、白狼と目があつた気がしないでもない。その目は血走っている。すでにナオミは目で噛み殺されたといつてもよい。

（もう、だめだ！、こんな巨大な狼なんて今まで見たことない）

ナオミが瞳を閉じれば、狼は雄叫びをあげて、ナオミが身を潜めている木陰を飛び越える。すぐに「うわああー！」という耳をつんざく悲鳴が木々の間を木霊した。またベチャグチャツとヒトを味わう嫌な音が聞こえてきた。

（獣と目が合つたのは、きっと氣のせいだ。早くここから離れよう）
ナオミは恐るおそる瞳を開けると、その瞬間、目の前に一匹の巨大な白狼が少女を凝視している。その白き悪魔は唸り声をあげ、牙を剥きだす。牙を見たとたん、少女は恐怖のあまりに腰が抜けた。獣の口には先ほど喰らつた、人の顔の残骸が残っている。白狼が大きく口を開けた瞬間、ナオミはぐつと瞳を閉じた。

同時にキヤン、キヤンッと狼の鳴き声が聞こえる。ナオミが白狼に目をやれば、狼は口に剣を突き刺されたらしく、巨木の根元で血泡を吹いて無残に死んでいた。

「どこからか「おい、生きているか？」と低い声が少女に呼びかけた。濃霧のせいで声の場所が突き止められない。どうやら数歩先から声の主とその影が見える。こちらに近づいてくるようだ。ナオミは、怯えた目を細めながら恐る恐る声のする方向へ視線を向けた。そこには、顔におぞましい刺青がはいつている男が立っている。左耳にはラインストーンの埋め込まれた象牙の飾りのピアスをしている。右手には宝飾が施されている剣を握り、刃には血がポタポタと滴れ落ちている。おそらくその剣で魔獣を殺したのだろう。身なりといえば、黒革の丈夫そうなフロックコート。そしてこの凍てつく寒さから顔を守るためにウールの黒いマフラーを巻いている。髪は焦げ茶に黒色の山高帽という黒一色の不気味な男だ。

その黒ずくめの男は「大丈夫か、お嬢ちゃん？」と再び少女に声をかけ、剣に付着した獣の血を持っていた布で拭い去ると黒革の鞘

におさめた。そしてナオミにそっと手を差しだした。少女は震える手で彼の大きな手を握りしめる。

「た、助けてくれてありがとう、おじさん。」

同時に恐怖のあまり、ナオミの頬からぽろぽろと涙がこぼれ落ちた。

ナオミは黒ずくめの男の後ろをみて、目を大きく見開いた。

男は少女の恐怖にせまつた目をみて、警戒を怠らないように静かに振り返った。左耳のピアスの象牙の飾りの房が煌く。黒ずくめの男の後ろには、尋常ではない巨大な狼の十五匹の群れが唸り、待ち構えていた。魔獣の臨戦態勢だ。

あの嫌な音が、まだ聞こえてくる。ガツガツと嫌な音、ベチャグチヤツとヒトを味わう音だ。

黒ずくめの男は外套を襲つてきた白狼の眼に被せ視覚を奪つた。瞬時にあるの剣で「獣の分際で俺様に勝てると思つていいのか！身の程知らずが」と、意気込みながら、一匹の狼を左右に切り捨て道を拓く。にぶい感触と生温いものがしぶいて少女の顔を汚していく。

首筋を伝つて、小さな胸に滴り落ちる感触にナオミは震えた。多勢に無勢だ。

「子連れだと不利だ、たしかすぐ近くに水汲み場があつたな。助かりたければ、そこまでついて来い、あそこだと聖水の魔法が使える」「聖水の魔法つてッ！」

ナオミは意味深な言葉に声を荒げた。

この男、荒くれ者の無頼漢のようだが、一体何者なんだろ？

相当な剣の使い手には間違ひなさそうだ。一人で逃げるよりも、今はこの男の言うとおりにした方が助かるかもしれない。ナオミを

襲おうとした狼の死骸をみながら少女は思う。

「でもおじさんっ！私、腰が抜け動けないのっ、置いていかないで、お願ひ！」

「これだからガキは嫌いなんだよ」と剣士は、剣を再び鞘におさめると、ナオミを背負い小走りに水汲み場として使われている泉へと、全速力で駆けだした。鼻先も牙も赤く染まっている獸の群れは、肉を食い尽くしあばら骨の塊となつた残骸を捨て、生きている彼女たちを目がけて物凄い速さで追いかけてきた。

二人の背後から、木々がドッスン、ドスンとなぎ倒されるのが雄叫びとともに耳に入つてくる。濃霧によつて視覚が遮られようが、魔獸には敏感な嗅覚がある。奴等が血眼になつて追いかけてくるのが、否応なしに想像できる。迫り来る死の恐怖から少女は後ろを振り向くことができない。

陰鬱な木々の間に、ピカピカと宝石のように光り輝く絨毯のようなものが見えた。泉だ。それはまるで漆黒の夜に、航行する船舶へ存在をあかあかと照らし示す灯台のようだ。まさしく今のナオミにとつて泉は灯台に等しい。

十三匹の魔獸に追い込まれながら、刺青の男は必死に泉へ水飛沫をあげて駆けこんだ。水はそれほど深くはない。小さな滝壺といった感じだ。膝まで水が浸かるなか男はぶつぶつと何やら呟きはじめた。濃霧のなかで、落葉樹の小さな木が目の前まで倒れ、十三匹の魔獸のうち一匹が口を大きく開けて襲いかかってきた。少女はこの男の命令に従つた自分を哀れみ、人生を後悔した。

「もう、終わりだわ」

瞬間、泉全体に光の六芒星の円陣が現われ、ナオミたちを太陽のような光で包みこんだ。

なにか神々しい力を感じる。その薄い、ヴェールのような光は波打ち、ナオミの肌にまとわりつきながら天空へと昇つていった。襲いかかってきた獸は、その光に触れたとたん悲鳴をあげ、瞬時に灰と

なり森に散つた。魔獣どもは、攻撃を一時的にやめ様子を見ている。少女は投げ捨てるように黒紳士の背中からおろされた。

「聖水の魔法陣、『守護聖人イヴの護り』だ！ お前は、そこにいろ！ 魔獣どもは魔法陣には踏みこめん。いま泉は、守護聖人イヴが降臨している。フェンリルがそこに触れた途端、その汚れた魂とともに連中は聖人イヴの力により跡形もなく消滅する」

セイスイノマホウジン、シユゴセイジンイブノマモリ？ そういえば、今日はクリスマスイヴだけど、そのイブノマモリと何か関係が？ 聖水の魔法つてコレなの？

巨大な白狼たちが泉のまわりをぐるぐるとまわること数分、殺気がナオミの肌にびんびんと伝わってくる。「退いてはくれないか。これではつきりしたよ。お前たちに科せられた任務つてのがな、狙いは俺か、それとも……」黒い剣士はナオミに目をやつた。

狙いは私？ そんな馬鹿なことがあるもんか！

「私、狙われる理由なんてどこにもないわ！ 私は、ただ水汲みに来てだけなのに！」

ナオミは思わず声を荒げた。黒ずくめの男は少女の耳元で囁き伏せるように囁いた。

「連中はフェンリル狼、北欧神話に登場する邪悪な神々の末裔。今は迷いの森に住みつく白い悪魔と呼ばれている白狼だ」

北欧神話に登場する邪悪な神々の末裔？

男は淡々と白き悪魔の知識をナオミに教えてくれる。

「フェンリル狼ってのは、野晴らしで生きているわけじゃない。飼い主に餌付けされて育つ。連中が厄介なのは精霊使いに命じられた

ことは、死ぬまで遂行する習性があるということだ。この森のビックリに飼い主である精霊使いがいるはず、そいつを半殺しにすれば全てがわかる。このわん公どもを手懐けるほどだ。相当のでだれに違ひねえがな」

ナオミは怯えながら「精霊使い？」と男の言葉を繰り返した。男は苦笑しながら「一昔前までは魔道士と呼ばれ、自分の影に數十匹もの魔物を棲ませている連中のことだ。そいつが迷いの森からこの森へ、獣どもを魔法で呼び寄せたんだ」

セイレイツカイ。マドウシ。マホウ。

「奴らの目的が俺ならば逃げ道はない。戦わねばならんようだな。これは俺と運命との戦い。お前は一步もここから出るな」と男は意味深に呟くと、狼の群れへと斬りこんだ。

ナオミの心は空っぽだった。銀の丸ぶち眼鏡に映る十一匹もの魔獣が現実として、まだ理解できていない。黒剣士は全身血まみれに狼をなぎ倒していく。まず手始めに獣の心臓を一撃で突き刺し三匹が秒殺された。

獣の親兄弟か、傍にいた三匹の獣が血眼のおぞましい形相で黒紳士に吼えながら突進していく。

男を味わうというよりも食いちぎるような雰囲気だ。剣士は、このときぞばかりに後ろの魔法陣へ身を退いた。その三匹の魔獣は、光に激突し瞬時に風塵となり濃霧に消えた。

「愚か者め、戦いの際に感情をむき出しにするとはな。残り六匹だ」と男は少女にそう伝えると息があがつたのか、白い息を吐きながら魔法陣の中でしばらく座り込んでいる。

鳥の鳴き声が聞こえる。原始林は濃霧に包まれながら、刻一刻と時間が過ぎていいのだが、ナオミには時間がとまっている様に思えた。早く夢なら、覚めてほしい。そう願うばかりだ。それにしてもあの

巨大な魔獣の群れを、一瞬で半分も始末するなんて、この男はなんて恐ろしいの。少女は獣と同時に男にも恐怖感を抱き始めた。

「おらあよつと」、いきなり立ち上ると黒剣士は魔法陣から飛び出て、一匹の魔獣の前足を切りつけた。痛みと巨体の重荷に耐えられず獣が、前屈みに倒れると同時に原始林の木々もバギバギと倒れる。黒剣士は、すかさずその獣の脳天を鋭剣でぶち抜いた。獣の口から大量の血が噴出す。男はその返り血を浴びながら、その屍骸を踏み台に勢いよく跳躍し、濃霧の中へ消えていった。

数秒後、四匹の魔獣の雄たけびにちかい悲鳴が大森林に轟いた。あまりの轟音に鳥たちが驚愕し、その場を離れる。まるで悪魔たちの殺し合いによる唸り声のようだ。

しばらくして魔法陣に血生臭い男が、侵入してきた。ナオミは、思わずギョッとした後さりをした。あの黒紳士だ。返り血を浴びて、その殺氣立つた姿は人というよりも悪魔にちかいように思えた。

右ふくらはぎを深く噛まれ、膝をつく黒ずくめの男。かなり疲れている。

柄を握りなおし少女に告げた「あと一匹だ、返り血で奴等の鼻も判断不能になつたおかげで殺りやすい」とつぶやくと再び魔法陣を後にした。

最後の狼が前屈みになつて跳躍し頭を低く垂れるのを見てと、
「うおおお　おお！」と黒剣士は雄たけびをあげた。

この男にとつてももう限界なのだろう。最後の一匹にむかって、うまく腹に滑り込むと剣を振り上げる。勢いあまって前のめりにと倒れつつも、剣は白い毛皮をざざと切り裂き、その首を見事に討ち落とした。首をなくした狼の身体は血の噴水だ。痙攣を起こしながらもがいでいる。立ち上がつたと思えば躓く。まさに虫の息だ。首は体から離れようがまだ意識はあるみたいだ。血泡を吹きつつも、その目玉はナオミにむけられていた。これは仲間を殺され、黒

き炎の憎しみが宿つた恨みの眼だ。

男は、なえた手で再び柄を握りなおし、剣を地に突き立て体重をささえていた。声をあげて息をすれば肺が痛い、脇腹など焼けつくりに痛い。「さつさとでるんだ！ 一人で帰れるか？ 魔獣は全部始末した。私は精霊使いを探しに行く。なぜそこまでして俺の命を狙うのか、その理由を知る必要があるからな」と男はナオミを睨み据えた。

サツサトデルンダ？ 嫌だ。怖い、ここから一歩もでたくない。

「さあ！」と語氣強くいわれ、脅されるように殺戮の現場に足を踏みいれた瞬間、頭だけの白い狼は昆虫のように這うようにして、鋭き牙をむきだし、ナオミと男に喰らいついた。少女の意識が薄らいでいくなか、男の「しまった！」という声が聞こえてきた。

チイツ！ まだ首だけ生きていやがった。フェンリル狼の首は力尽きたのか、瞳に光がなくなると、一人を牙に挟んだまま動かなくなつた。 ザクッ、近くの藪から土を踏む音が聞こえた。

森の木陰から現われた男の姿みて、黒ずくめの男はそのまま狼の飢えた舌に顔を落とした。絶望のあまり顔をあげることができない。

「謀られた、奴が獣の飼い主なのか？ 牙に挟まれて体が動けん！ こんなに近くにいたなんて。気づけなかつた」

いや待て、あの制服には見覚えがある、と男は朦朧とする意識のなかで思う。

そうだ、かつて私が着ていた制服、確かにそうだ。襟元に金の糸で刺繡された騎士団の紋章。あれは公国の最高権威「円卓の騎士団」の制服。そしてあの月文字のイニシャルに、大鷲の銀のカフスボタ

ン。あれは私の制服だ。まさかあの男が。

「 きさま！」 黒ずくめの男は、顔を狼の牙に挟まれながら、声を荒げた。藪からでてきた謎の男は、ほくそ笑んでいる。どうやら刺青男と面識があるようだ。

「 やはりきさまかあつ！」

まさかお前とは思わなかつた、刺青の男は腹の底から叫んだ。間違いない、奴なら魔獣を召喚できても不思議じやない。間近に足音が聞こえ、顔をあげた瞬間、不敵な笑みを浮かべ、謎の男は刺青の男に向けて拳銃を二発、「バーンッ！バーンッ！」容赦なく撃ちこんだ。銃弾をぶち込まれた男の頭から無言の血があふれ流れ、脳みその破片がナオミの顔にへばりついた。

殺しを終えた男は息が絶えたえの少女にも銃口を向けた。

オネガイ、タスケテ！ と擦れた声で命乞いしようつとも、男は首を横にふる。

「怖い」と心の底から思った。死ぬのは怖い、他人に殺されるのも怖い。誰かが男の声をつかつて「運命を変えてみせる、ヒトの子よ」と呟いたようにも思えたが、きっと気のせいだらう。

ああ、意識が遠のく。これが死ぬつてことかな。これでお別れだね、サヨナラ。

薄れゆく意識のなか「ドンッ！」と鈍い音とともにカンペールの森で、羽を休めていた青い鳥の群れは羽ばたいた。そのうち一匹は古き都ヴァンヌの方角へ飛び去つた。

第2話

迫りくる死の恐怖に怯えてナオミは、ベットから飛び起きた…！

拳銃で撃たれた体の部分を恐る恐る触つてみても、銃傷はない。痛くもない。少女は自分の右掌を握りしめながら、「またなの。これで五回目、いい加減にしてよ。まったく嫌な夢だわッ！」と声を大にした。そして鳥肌の立つている腕をさすりながら、身体に弾丸がぶち込まれていなことを再確認し、改めて生きていることを実感している。

最近になつてよくみる光景なのだが、しょせん夢は夢でしかない。ただナオミは、どうもそれがただの悪夢には思えなかつた。ここ最近、自分は「夢の中でさらに夢」をみている。

埃臭いマホガニーの粗末な造りのベットから、少女は、仰向けに低い天井をぼおーと眺めては物思いにふけつている。薄暗いなか手探りで近くに置いてある丸い眼鏡を探しながら。

下・コジン
新渡勇人という自分と同じ姓の、生意氣そうな少年の夢を何度もみるのだ。その内容は変わつている。なんたつて二〇一一年、ずっと先の、そう日本という国の未来の出来事なのだから。なんだか変てこな気分だ。

（えつと何だつけ？ 僕はテブじゃない、ぱつちやりだつけ？）

寝不足と疲労のなか、丸い眼鏡をかけると少女は、薄い毛布に小さな顔をうずめた。すでに忘れつつある悪夢を、なんとか記憶にとどめようとしていた矢先、屋根裏部屋のドアが「ミシッ」ときしんだ。足音が聞こえる。ナオミがドアの外に耳をすませば、ドシドシと誰かが少女の部屋に勢いよくあがつてくるよつだ。

十九世紀中期に起きた産業革命は、全ヨーロッパの人々に英知と技術を与え、魔法の時代から油の時代へと思想を変化させた。とりわけ蒸気機関の発明は、人々の生活様式さえも180度も方向転換させ、新しい社会へと向かわせた。だがフランス西部、ブルターニュ地方のフィニステール県南部にあっては、産業革命の風なんて、あたかも関係ないように相変わらず古い時代のままだ。オデ川下流の美しい小さな町カンペールも例外ではない。

今日はクリスマスイヴとあって、この町も少しばかりにぎやかになる。町に一步、足を踏みいれてみれば、花崗岩でできた古い家並みがとても美しいこと。車の乗り入れが禁止された市街地には、中世の面影を残す美しい家並みが続いており、眺めているだけでも楽しくなってしまう。

去年の今頃はそつと耳を澄ませば、ある大きな家の広い庭ではキヤツキヤツと子どもたちの遊び声が聞こえてきたものだ。大聖堂の莊厳な尖塔を望むレオン通りや食料品店、パン屋が並ぶフレロン通りといった商店街通りは、そぞろ歩きにはぴったりの散歩道だ。町のバター広場をすぎて、ゆっくりと田にはいるのはサン・コランタン大聖堂だ。

町の交差点、目抜き通りには古びた旅籠がある。カンペールで二軒しかない旅籠のうちの一軒、ジジ亭だ。

「ポツポー、ポツポー」とジジ亭の鳩時計の音が聞こえてくる。外に通じる一階の廊下のゼンマイ式の壁掛け時計だ。銀素材で作られており、形は細長く天辺には深緑のタイル屋根があしらわれている。時計の下部の外装には、フランスのどこかわからないが、数名の騎士と尖塔のある美しい城、そして城下町が高浮き彫り細工であしらわれており、とても見事な職人技といえる。黒いアラビア数字が刻まれた白い大理石の文字盤には、数字に寄り添うように金の唐草文様装飾とグリーンのエナメル加工が施されている。そこから文

字盤の真ん中へ視線を移すと時間の番人が住む丸い巣穴がある。鳴き音の回数から判断して、

今は 午前四時三十分。

町の人々の多くがまだ眠りから覚める前、旅籠の屋根裏部屋の埃くさいベッドのなかで、ナオミは目に強い酸味、痛みを感じて目を覚ましていた。鳩の鳴き声を耳にして慌てて何度も瞬きをしてようやく深い息をした。

いつもどおりドンドンと足音が近づいてくる。勢いよく屋根裏部屋に通じている扉が開くと同時に「おい、野良！ いつまで寝てるんだい！ この居候娘！」とつづけんどんな鋭い声がした。

声の主は、宿の女将ヤドリギだ。人相といえば、肌は青白く顔は「じまう」のように細長い。茶色い目は吊り上がっており、鼻は鉤鼻だ。髪は、銀髪で高く高く編み上げ、まるで玉ねぎのよつだ。見るからにケチで性悪そうな女に見える。

服装は細長い深縁のレースの模様が入った絹のスカートに、襞の付いた白いブラウスに革仕立ての前掛けをしている。革靴は黒エナメル仕立ての花柄。すつきりとした長身だが、性格がにじみ出ているせいか、キリキリした感じが歪めない。左の薬指にはめたルビーとダイヤモンドの結婚指輪が、女の虚栄心を強調させる。

ナオミは目をつぶつて、眠っているふりをした。

「さつさと水をくんでこないかッ！ 何時だと思つていいんだい！」

ヤドリギ夫人はナオミの体を、おもいつきり蹴り飛ばしながら言ひ放つた。

「ごほッ、もう起きています。奥様」しぶしぶナオミは寝返りをうつた。

これも起きる時間を一分でものばそうと、彼女の作戦だ。でも

夫人がパツとうすい毛布をはらいのけたので、ナオミが生まれた頃から枕のかわりにしてあるダックスフンド、彼女はこれをジヨジヨと呼んでいるのだが、彼を抱いて寝ていたナオミもさすがに寝床からはね起きた。

そういうつもなら、午前四時には起きて身支度をしていなければいけない。

ナオミはヤドリギ夫人のまえに寝起き顔でたつた。

「今度、寝坊したら朝飯ぬきだからね。この野良犬め！」

間髪入れずに夫人の右手がナオミにとび、ナオミは小さな声でうめいた。

「お前は孤児、私たち親子がしかたなく育ててやつてているんだ！」

そんなこと耳にタコができるほど聞かされている。

自分は孤児、身寄りのない親なしだ。父の遠縁のヤドリギがどんな理由でか知らないけれど、親に捨てられた自分を嫌々ながら引き取ってくれた。当然、ここで住まわせてもらつているかわりに働くことが条件なのだが。

「帰りにいつものパンを買つてくるんだ。ほらつ、十フラン銀貨だ」

ナオミは何もいわずにお金を受けとると、とても憂鬱そうにのろのろと起きあがり、どんよりとした暗い気持をおさえ、寒さに震えながら仕事着へと着替えた。すじばつた細長い足というか、膝小僧が目立つてきている足を色褪せたデニムのジーンズにとおし、毛糸のボロいセーターのうえに糸のほつれたウールのカーディガンを羽織つた。そしてお世辞にも、きれいとはいえない古びた木綿のエプロンを掛けた。おかみから受け取つた銀貨は、エプロンの小さなポケットのなかにさつと忍ばせた。

その頃、旅籠の主人ヤドリギといえは一階の寝室で大あぐびだ。うーんと背筋をのばし「ボキボキ」と背骨を鳴らさせて気持ちを整えている。その息子ハレルヤは、そんな親父を蹴飛ばして、「ぐうーぐうー」と鼻詰まりのようなイビキをかきながらまだ寝ていた。この肥満児は、ナオミと同じ年にしては、なんと恵まれた境遇だ。いやこの少女が悲惨な私生活を送っているだけなのだろう。

ナオミはもじゅもじゅの栗色の髪をなでつけると、どことなくあどけない顔をゴシゴシこすった。ああ、そうだ。今日はジヨジヨ・ダックスフンドを連れて行こう。突然、女将の怒鳴り声が聞こえてきた。「さつさといきな！ この親なし、ろくでなし！」

少女は逃げるよう、一目散に階段を下り炊事場に置いていた桶をひっさげると外に出た。外気は凍てつき、肌がピリピリして痛くあまりの寒さに手がかじんだ。空にはひとつの星もなく、まだ真つ暗だった。

第3話

カンペールの西はずれには、人の手が一度も入ったことのない大森林がある。

年中霧につつまれた陰気な森だ。足を踏み入れれば夜泣きふくろうやカツコーの鳴き声が、不気味に恐怖心を駆り立てるかのように、朝方になつても聞こえてくる。

太古からうつそつと生い茂る奇妙な草花、なかでも圧倒的な存在感を放つのは、陰鬱な空気をかもし出している巨木の数々だ。落葉樹のオークをはじめ、樺やカシワといったブナの巨大な木々、その太さと高さとともに、ゆうに4階建てのオランダ型風車並みだ。森全体がひとつの共同体であり、まるである旧約聖書のバベルの塔のような威圧感がある。よそ者に恐ろしい巨人族が住んでいると法螺を吹聴しても、一発で信じてしまう程の因習深き原始林。その本格的な冬がはじまりつつあるカンペールの十一月は、いやはや肌寒いどころではない。

最近のナオミの朝の始まりは、朝食の前にこの森の泉に水を汲みにいくことだ。

しかも朝夕と日課、というのもジジ亭を含めたカンペールの一部区域で、水道管が冬の寒さのために破裂してしまったためだ。水道管修復の工事はあと一週間ほどかかる。それまで彼女が森の泉に水汲みにいくことがヤドリギ家一同の総意として取り決められた。もちろんナオミには発言する権利さえも与えられていない。クリスマス前夜祭といつても、彼女の日課はなにも変わらないのだ。

ナオミが行かねばならない森は墓地をぬけたところにある。そこ

は夢にもでてきた場所。およそ四半世紀前までは、カンペールの人々の生活用水は、この森の天然水に依存していた。今では水道管が彼らの生命線なのだが . . . 。

「このあたりつて幽霊がでるらしいよ」と墓石で羽を休めながら、こちらを凝視している数羽の氣色悪いカラスにジョジョがキツとメンチをきりながら、少女に呴いた。

「はいはい、聞き飽きましたよ。耳たれダックスフンドちゃん」

少女は墓地が怖いのか、早足で通り抜けようとしている。

ジョジョ・ダックスフンド、この黒色のミニチュア・ダックスフンドとナオミは小さいときから一緒にいるせいか、二人だけの会話ができる。

冬の水汲み、いや水汲みそれ 자체、おそらく十二歳の女の子にとつてきつい仕事であり、かわってくれるものならかわってほしいぐらいなほど、かなり骨の折れる仕事だ。そうこれは男の人の仕事なのだ。ナオミは弱音こそはかないが、両手両足は血豆だらけで力サカサ、いつも血がにじみでていた。しかも冬の季節は、たださえ炊事と洗濯に慢性的なしもやけに悩まされているというのに。

墓地を通り抜けてほどなく森に入ったとき、水汲みにきている男の人とすれ違った。

一瞬、ナオミの脳裏に衝撃が奔った。

あの人は、どこかで見覚えがある。そうだ、夢の人だ。夢のなかで白い狼に食べられていた人だ。ナオミは、理由なくいきなり足が震え出した。本能なのだろうか、理性で抑えようとしてもガクガクと両足が震えてとまらない。少女は、濃霧の中で立ち往生したまま、固まってしまった。

そのとき彼女の背後から、バサササーと鳥の群れが羽ばたいた。

「さやあああ！、噛み殺さないで！お願いだから…」

思わず顔を両手で覆つて、ナオミは座り込んでしまった。

「どうしたの？ただの鳥だよ」

ジョジョは怯えるナオミのカーティガンの袖を噛み、前へ行こうと促している。

数分が過ぎた。相変わらず森は静かで重苦しい濃霧が立ち込めている。死ぬべき男性は、無事に森を抜け出たのだろう。悲鳴が聞こえてこない。

（そうよ、所詮、ただの夢じゃない。第一、あんな巨大な白い狼なんてこの世にいるはずがないわ）

少女は、気を取り直して目指すべき場所へ向かった。

泉は坂を下つたところに湧きでていたため、行きはそれほどでもないが、帰りは木の桶に水を汲んでいるわけだから、これが一仕事なのだ。なれないうちは何度も転んで泣きながらやり直したものだ。今だつて転んでやり直すことはしばしば。

水汲みが遅ければ、ヤドリギ夫妻の罵倒とせつかんが待つていた。夫妻がなぜ自分を虐めるのかはわからない。ヤドリギは「さつさと白状するんだ！」というが、一体全体、自分は何を白状すればいいんだろう？一度、彼らの虐めがやむものならと、あのことを白状したことがある。

そう、あの魔法のことだ 町のはずれに住んでいる、ダ・カーポという知り合いの魔女にヤドリギ夫妻を呪い殺す呪文を教えてもらい、日々練習中だと白状したら、往復ビンタが容赦なく少女の頬にとんだ。こんな奴隸のような生活が嫌で逃げだしても、口ではでていけと口汚く罵られても、何度も連れ戻される始末。きっとヤドリギはナオミから何かの秘密を聞きだすため、彼女をそばにおいて

いるのだ でもそんな秘密などナオミは知らない。

以来、少女は黙つて彼らの虐めに耐え忍んでいた。

ナオミはこのよつたな夫婦の間で洗濯や掃除、使い走りなどにこき使われ、ひ弱い体をぼろ雑巾のようにくたくたにしていた。そんな野良犬のような姿からつけられた名前が野良、だがこの家でナオミの存在は野良犬どころか、犬の糞扱いだった。

耳を澄ませば聞こえてくる、森ふくろうの鳴き声に、ふと我に返ると少女と犬一匹は、泉にたどり着いていた。森の中では濃霧が太陽の光を遮断している。しかし水汲み場は、水の純度が高いせいか、暗闇の中でキラキラと輝いている。まるでダイヤモンドを散りばめた純白の絹のウェディングドレスのよつだ。霧のなか地下水が地表に自然に出てきた水は凍ることなく、小川をつくり森に生命を吹き込んでいた。

少女は両膝を湿つた地面について、利き手を支えに上体をかたむけた。

「よいしょっとー」と自分の体と同じぐらいの桶を水のなかにいた。

ガツ、ポツと桶が冷水に浸かつた鈍い音がする。

そのとき胸ポケットから十フラン銀貨が、静かに泉に浸水するようすべり落ちた。目の前の仕事をこなすだけで精一杯のナオミは、銀貨が落ちたことなど気づかず、水がたつぶりとはいつた桶を力いっぱいひきあげ、その場にしゃがみこんだ。ピチャツと桶の水が少女の頬にはねた。

「うひやあ、冷たい！」

大きく息を吸いこんで一休みすると、両手で水が溢れださんとばかりの桶をもつたものの、数歩ほど歩いては休み、歩いては休みの繰り返しだ。

白くて細い腕は重い桶にひつぱられ、ガチガチになつた。

あかぎれの手からは、たえず血がにじみでていた。ナオミはあえき、肩で苦しそうに白い息を吐いた。すすり泣きがこみあげ、喉が思わずつまつた。

「ああ、そんな！」

道が悪かつたのだろう、昨夜から積もつた新雪でナオミは転んでしまつた。服もびしょぬれのなか、少女は黙々とくみ直しのため泉にむかつた。ときどき口に両手をあて、温めながら瞳にうつすらと涙をためながら、少女を水を汲むのだ。

坂を登りきつたと思いきや、霜により道がぬかるんでいたため、ゴロンッと勢いよく転んでしまつた。今日はなんて運がついてないのだろうと唇を噛みしめて、木の桶をみた。だが水はこぼれていな。一本の太い手が桶の柄を握つていたからだ。

少女は頭を上げた。

「手伝おう」

黒ずくめの男の低くて太い声。

ナオミは雷が身体に走つたように身の毛がだつた。明らかに恐怖ゆえである。その声は、聞き覚えのある嫌な声だ。見知らぬ紳士、（いや夢の中で知つているから「見知らぬ」とは言えない。相手が知らなくても私は知つている）が桶の柄をしつかりと持つてくれていた。

「一人でもつて歩けます」

ナオミは心にもないことをいった。

少女は、夢にでてきた「あの男」なのかを確認するため、男の形相を注視した。やはりそうだ。一度見たら忘れられない、あのおぞましい刺青。左耳に象牙のピアスをしている。

あの魔法を使う男だ。この男は何者なんだろう？彼の目的は一体

なんなの？

よほど物好きなのか、少女がお礼をいい、木の桶を受け取ろうとしても男はそれを拒み、自分が運ぶといはる。少女のあかぎれの両手をみ、麗しいほどの大きな瞳、力サカサの唇をみて紳士はウールの黒いマフラーに深く顔をうずめた。

「おじさん、どうして手伝ってくれるの？」

紳士のかわりに「きっと誘拐するつもりだよ」

ジョジョがナオミの恐怖心を呴いた。

「道に迷つてしまつてね、カンペールに行く途中なんだが、森に迷いこんでしまつたんだ。もしかしてお嬢ちゃん、君はカンペールから来たのかね？」

信用してもいいのだろうか、夢のなかでは、味方ではなかつたけど敵でもなかつた。

今はこの男を町まで案内すべきだ。だつてこの黒紳士は強い、なにあつたらきっと夢のようだに護つてくれるはず。

「ええそつよ、あたしは今からカンペールに戻るの。ついでだから町まで案内しますわ、ムッシュ」

ナオミは怖がりながら、黒ずくめの男にいった。

「ああ、それは助かる。で、こればどこにもつていけばいいんだ？」

「ジジ亭、町の古い旅籠です」

「それはちょうどいい。私は今夜、そこに泊まる予定だつたんだよ。いやジジ亭に会わなきやならん人がいてね、部屋は空いているかね？」

？」

「ええ、たくさん！」

ナオミは田のまえの男がジジ亭の泊まり客とわかつて一安心だ。

ジョジョは（いいかい？ 油断しちゃだめだぞ、人さらいかもしれないから）とボソボソ。

ダックスフンドの忠告、まさにそのとおりだ。きっとヤドリギの友人か何かに違いない。それなら尚更、油断大敵だ。悪い魔法使いかもしない。木の桶を返してといつても、これは女の子の仕事じゃないよ、と入り口まで自分が運ぶといいはる。こんな変わったお客様は初めてだ。

男と森を歩くな、ナオミはふと今朝見た夢を詳細に思いだしていた。

この人は白い狼から自分を護ってくれる、例の黒ずくめの男の人には間違ないわ。黒革の丈夫そうなフロックコートにウールの黒いマフラー、焦げ茶の髪に黒い山高帽の黒一色。やはり今日が運命の執行日　ナオミはそう思つと震えあがつた。

突然、ジョジョが何かの気配を感じた。

「ねえ、あそこに大きな狼の群れがいるよ、ヤバイよ」とジョジョ。「……！」

やはり、そうだ。夢は今、現実のものとなろうとしている。

どうしよう！　どうすればいいんだろう！　再び膝がガクガクと震えだした。

刺青の黒紳士は魔法が使える。だが夢では精霊使いとやらに殺された。こうなればこの人が戦っているうちに逃げるしかない。私も精霊使いに銃で頭をぶち抜かれるのは、御免だ。ひ弱な自分が助かる方法はそれしかない。そう思つと、緊張しておしつこがしたくなつてきた。

ジョジョが狼の群れにむかって吠えれば、狼たちも吼え返した。

「おじさん、あそこに迷いの森のフェンリルがいるの！」

やはり間違いない、今日は運命の執行日なのだ。

男に背をむけ、ナオミはいつでも逃げる準備ができている。黒ずくめの男は少女がなぜフェンリルを知っているのか、疑問に思いつ

つも、外套から剣をとりだし勢いよく地面にしゃがみ込み、ザクッと剣を大地に突きさした。

呪文を唱えると剣の柄にあしらわれている宝飾がにぶく光り、耳をつんざく音とともに空間が大きく歪んだ。目が回るぐらいの速さで周りの景色が黒ずくめの男を中心に回転していく。

間髪いれず、悪夢のよつたな白い狼たちが、濃霧に影を映しながら物凄い速さで襲い掛かってきた。

バギイ、バギバギツと小さな木が、なぎ倒される音が聞こえる。狼どもの血に飢えた牙を見た瞬間、ナオミは腰が抜け逃げるどころではない。やはり影を見るだけでも巨大な狼だ。木が碎かれる音がだんだん大きくなつていく。

「確實に喰い殺される！」と少女の頬からは大粒の涙が流れてきた。そして死の惡寒から全身蒼白になつた。ジョジョは死んだふりをしている。

「もうだめだ。やつぱり正夢だったのね」と少女が目を閉じた瞬間、白い悪魔たちはナオミの三歩手前で何かに遮られ、前に進めないようだ。不気味な唸り声だけが、大森林を一人歩きしている。獸どもの生臭い吐息が、少女の顔へと吹きかけられた。

「守護聖人イヴの封印だ」

シユゴセイジンイブノフウイン？

「聖人イブがこの地に降臨し、俺たちの盾となつてくれている」と凛とした黒い男の声。

不思議だ、夢ではイブノマモリだったのに。

男が「聖人イブの許により汝らをこの地に封ずる」と呪文を終わらせれば、空間の歪みは狭まり、獰猛な狼たちを丸い水晶のように

濃霧とともに包み込み、狼の群れは地面に沈んだ。逃げる機会を失つたものの、どうやら命は助かつたようだ。

す、す、JRへ！ やつぱりJRの人は強い。

ダ・カーポの影響もあって、ナオミは魔法を信じている。多少のことでは驚かない。でもこんなすごい魔法を実際に目にしたのは初めてだ。興奮とともに驚きを隠せない。だがこれは列記とした現実、目の前で起こっている確かな事実。決して夢ではない。

白き狼が封ずられてまもなく、森に隠れていた男は舌打ちとともに姿を消した。

「しかし、カンペールの森は、何もなかつたように、静けさを取りもどした。魔獸は千年、この森の守護精靈となるだろうと、男はいつた。だから、今の時代にあつても、カンペールの森に夜々、狼の遠吠えが聞こえてくるのは、このせいである。」

「君のおかげで助かつた、あと三秒遅ければ

いうおなじく、悪夢と回じないう現実になつていただろう。

た。 しかし、ナオミの運命はかねてから、何事も問題がわかれは
対応はできよう。問題なのは、多くの人々がその問題そのものがわ
からないという点。確かにナオミは違つた。悪夢を現実のものにし
まいと犬を連れてきた。それがちよつぴり人の行動を変えた。小さ
な行動の連續が人々のつながりを生み、運命を変えるうねりとなつ
た。そして彼女の新しい運命の歯車は今、小さな音をたててまわつ

キミハブルトンジンカ？ ブルトンジンツ テナニ？ あの狼は夢
でみただけだよ。

でもここは素直に「うん」と頷いておくのがいいかもしない。
大人の世界、子どもには分からぬのだから。

町の教会が見えはじめた頃、ナオミはジョジョに狼と何を話していたのか尋ねた。

「同族は喰う趣味はない、お前だけ生かしてやるう」と狼たちがほざいていたそうだが、イヌ科であるだけで仲間と呼ばれ、生かしてくれるなら食物連鎖は成り立たない。

それにジョジョはどこからみてもかわいい黒色のミニチュア・ダックスフンド。あのおぞましい白き獸とは似ても似つかない。とっても小さい、真っ黒黒すけの臆病者のチビだ。「へん、そんなこと知つてらあ」ジョジョは舌をだらーんと垂らしている。原始林にいた青い鳥は「ヒトの子の運命は開かれた」と囁き、彼方へ飛び去った。

第4話

午前六時三十分。

そろそろサン・コランタン大聖堂の鐘楼から美しい音色が鳴り、町が息を吹き返す頃だ。

カンペールの人々は、大聖堂から聞こえてくる時間を基準に生活をしている。少女と謎の黒紳士、そして犬は、無事に町の交差点にたどり着いた。町の通路は石畳で舗装されている。田舎すべき場所は目抜き通りの古びた旅籠「ジジ亭」。

ジジ亭の外観は、赤いレンガのタイル張り。屋根は黒い瓦で葺いている。

三階建ての建造物で、一階と二階は宿泊用みたいだ。形は焼き菓子のカステラによく似ている。中一階部分に赤茶色のペンキで薄い灰色の木製看板に「宿屋」と書いてある。三角屋根の三階部分は家の物置小屋か、なにかの用途として使われているようだ。一階と二階の窓は綺麗なガラス窓に金箔の窓枠にたいして、三階の窓はひどく汚れており窓枠も塗装が剥離してボロボロだ。

本当に窓なのか疑うほどだ。旅籠の出入り口には大理石を加工した円柱に屋根がついており、薦がびつしりと生い茂りその一部が扉の下部にまで覆い被さっていた。扉といえば堅固な赤茶色のマホガニー製の両開き戸である。扉の淵は黒色の鋼鉄で補強されており、ヤドリギ家の家紋らしき紋様が左右に一分される場所に刻印されている。手前には青銅製の獅子頭に似せた訪問客用のドアベルが備え付けてあるという具合だ。

カラーンツ！ キカラーンツ！ とナオミはジジ亭のドアベルをかじかんだ手で何度も鳴らしたが、誰もでてこない。少女は、黒紳士に水桶を玄関においてもらいお礼をいった。

「ありがとう、おじさん！」

「こちらこそ助かったよ、お嬢ちゃん」

ドアベルを何回か鳴らしてみたが、ジジ亭の者は誰も出でこない。いやはやなにか起きたのだろうか。彼女は、ゼンマイ式の壁掛け時計の前を通り、黒いお客様をなかに案内した。家人用の暖炉の間を横切ると暖炉に薪をくべてあるらしく、その部屋はほんのり暖かい。ヤドリギ家の者はそこにみな勢ぞろいしていた。どうやら彼らにはドアベルが聞こえていなかつたみたいだ。

部屋の内装といえば、赤いラシャの厚手のペルシャ風の絨毯が敷かれている。

建物全体にもいえることだが外装の厳めしい様子と違い、天井面と壁面は明るいオーラによる板張りだ。暖炉の真上には、立派な角の雄鹿の剥製がかかつている。クリスタルガラス製の小さなシャンデリアがなんとも華麗だ。部屋には、三脚の背椅子と円いオーラ製の食卓そして木製の黒いポールハンガー。暖炉の傍に置かれている一人掛けの革仕立てのソファと来客用の同じソファがもう一脚。大きな古い木製のキャビネットが一つに、数冊の書籍と共に縦長い書棚があいてある。そのなかに小さな赤いラジオを確認ができる。

ジジ亭の主人ヤドリギは、草花の浮き彫り細工があしらわれている濃茶色の本革のソファにもたれて片足を組んでいた。湯気の立つスープをふうふうとすすりながら朝のラジオを聞き、朝刊をぼんやりと読んでいる。夫人は隣の台所で宿泊客の朝食の支度でてんやわんやと大慌て。

暖炉の間から一人息子のハレルヤは、台所に近い木製の食卓用の背椅子に腰を掛けその様子を愉快に眺めていた。短足なのが両足を

床の一步手前でぶらぶらさせ。ときおり皿をこすりながら食卓においてある熱い牛乳を陶器のマグカップにこすりと注いでいる。

その姿形はジジ亭の主人のミーチュア版といえば、たつた一言で片付く。

ハレルヤ坊やは、十一歳だというのにヤドリギにやつくりだ。脂ぎったテカテカの黒い髪につぶらな青い瞳、でかい鼻の豚面は小ヤドリギ、いや彼はあるでしゃべるブタのようだ。それゆえに父親であるヤドリギの形相をここで語るのは控える。ただ違うのは息子と違い、丈夫なツイードの紳士服を身に着けている点だけだ。生地は上品というより機能的でおおらかな感じがする。本人いわく毛織物の名産地である英國スコットランドからの輸入品らしい。少女には宿泊客の忘れ物か、ただの中古を質屋で購入したようにしか思えない。

よくハレルヤの友だちのお母さんたちは、小ヤドリギを「さすが名門のお家柄のお子さんだわ、とても賢そうな顔をしているわ」と褒める。だがナオミはどこからみても小ブタ、体よく言えばイベリコブタにしか見えなかつた。

ナオミは自分がそこにいることを知らせるためにも、恐る恐るドアをかるくノックした。

犬の糞扱いを、誰もこの家では家族の一員とは認めていなかつた。これはヤドリギの弟や妹、それから父や母とこつた親戚全員がそうだつた。いわゆる一族の辯みた的なものだ。こんな自分の立場を不思議に思つてその昔、ナオミも「なぜ私にはお父さんとお母さんがいないの」と質問したことがあつた。

「そんなこと、あたしが知るもんか！」これが夫人の答えで、ヤドリギの答えは「お前は犬の糞なんだぞ！」だつた。最後にハレルヤ少年の答えといえば「召使い一等」という感じだ。

それ以来、ナオミはヤドリギ家で自分の置かれた立場というか、立ち位置というものが自然とわかつたらしく、この日もおどおどした感じで、何かに脅えるように扉の傍でじもつていた。

「…あ、あの。ヤドリギおじさん…」

ジジ亭の主人は返事のかわりに彼女をチラリッと見た。

「お、お客様がいらしています」

ヤドリギは今度もチラリッとナオミと紳士を見た。

黒ずくめのお客は、少女に紹介され前へ一歩踏み出た。帽子に手をあてている。金持ちらしい紳士のいでたちだが頬の刺青といい、どこかうさんくさが残っていた。ヤドリギは女将と目配せして、つじつまを合わせるようにと会図をおくつた。

家族の朝の団らんを邪魔されたのか、不承面をしながら「旦那、残念ながらご予約がいつぱいでしてね、それについは前払いですよ」とソファから離れ、男の前に立つ。

ヤドリギは商売上手とあつて手をもみもみしていた。客など数えるしかいないこととは少女の会話で確認済みでありながらも、黒ずくめの男は間髪入れずについた。

「手間賃も含めて払う、なんとか良い部屋を五日間、都合してくれ」男は札束がずつしりとはいつた、山羊革の黒財布をわざとヤドリギ夫妻にチラとみせた。たちまちヤドリギ氏は猫声になつた。大人は子どもに強くて、お金に弱いのだ。

大金をはたいてまでも、この黒紳士が人を探しているみたいだが、わざわざジジ亭に泊まりたい理由が少女には不思議でならなかつた。巷ではこの汚い旅籠に宿泊することが流行なのだろうか。いやこの黒いお客様が変わり者なのだ。きっとそうに違いない。このお客様が探している人は彼の愛人かなにかで、この「カンペールのジジ亭」で落ち合つようになつているのだ、と少女は自分にそう言い聞かせた。

「お名前を頂戴してよろしいでしょ？」「ムッシュ…」

ヤドリギは宿泊名簿に名前を求めたので、男は右手ですらすらと自分の黒い万年筆を使い「ルレスエロ・ジエラール」という名を、職業欄の中には音楽家と書き、四百フランを田の前の男に手渡してやつた。ヤドリギは四百フランを嬉しそうに年期の入ったヌメ革の帳簿財布にしまいこむと（音楽家？あんなおぞましい刺青を入れておきながらか、そんな風にはみえんがな）と鼻の穴をひくひくと大きくした。

ナオミは、大金を支払つてのジエラールと名乗る音楽家を哀れんだ。

「ここは一泊当たり一十フランの昼食抜きの安宿なのに」

心にそう囁いた。声をだして教えてたくても守銭奴のあくの強い暗黙の睨みが彼女を押し殺している。

「野良、はやくお客様をお部屋にこ案内しなさい、一階の一一番奥の部屋だよ」と鉄輪がついた青銅製のスケルトンキーを傍にいた少女にメンチをきりながら手渡した。お客様の部屋の鍵だ。本当の宿泊料を奴に教えたらぶちのめすぞ！ と彼女を小声で脅す旅籠の主人。「こ亭主、早めに朝食を作つてくれないか？ 一晩中、道に迷つて森をさまよつていたんだ」と音楽家。傍にいた女将のヤドリギ夫人は、亭主に無言の視線を送る。最優先に刺青の音楽家の食事を用意することが決まつたみたいだ。まさに阿吽の呼吸。

「無理を承知済みでの頼みだ。量は少なめでいい。私の部屋に運んでくれ」

男の言葉に頷くと、すぐさまヤドリギは少女に瞬きを二回した。瞬き二回が意味するところは「お客の朝食はお前が運べ」というものだ。これがナオミと彼らが会話を交すときのやりかたでもある。

部屋へと向かう階段は歴史をただよわせる、大きくすりこすりへつた木製の螺旋階段。

手すりは大理石で装飾されている。騎士を題材にした浮き彫り細

工だ。壁にはこのジジ亭の歴代当主の肖像画が金の額縁で飾られ、どこか名門貴族を思わせる。階段は角がすりへり、歩くたびにミシツと床板がきしむ音が歴史の重々しさを感じさせた。遠くからはゴーン、ゴーン、ゴーンッとサン・ゴランタン大聖堂の暁鐘が鳴り響く。と同時に一階から壁掛け時計の鳩の鳴き声も聞こえた。

ジジ亭の一階の間取りは、部屋が全部で八つある。すべて宿泊客用の部屋だろう。

表通りに面する方に細長い廊下が一直線にはしり左壁面の向こうは外だ。もう片方の壁面に七つの部屋に通じる薄い灰色がかつた水色の櫻の扉が七つある。床は螺旋階段と違ひ石床だ。歩くとコツコツと機械的な音が響く。部屋は一定の等間隔で仕切られている。扉と扉の間には、白銀の甲冑、棍棒、先が三俣に分かれた槍や長剣といった類の武器や飾られている。中世の騎士時代の骨董品なのか、ヤドリギの趣味が伺える。実に気色が悪い趣味だ。

八つめの部屋は、廊下の一番つきあたりにある。

貴族や富豪、著名人の宿泊用部屋とかつて女将から教えられた上流客専用の部屋だ。ナオミは一度も、掃除にも入ったことがない。扉の色が違う。黒い扉に金の唐草紋様であしらい重苦しい雰囲気だ。捉えようによつては拷問部屋のようにも思えるのだが・・・。

ガチャーンッと主人から預かつたスケルトンキーを錠前に差し込み少女は扉を開けた。

身がよだつ冷たい音だ。音楽家は暖炉のあるその部屋に通された。ナオミは食事を運ぶためにすぐに階下に向かった。部屋の内装は、一階の家人用の暖炉の間とうり一つだつた。食卓もソファも、木製ポールハンガー、雄鹿の剥製もすべてが同じだ。絨毯の色と柄もだ。ヤドリギのことだ。一階の暖炉の間の調度品を買い揃えるとき、まとめ買いをしてその分、安く値切つたのだろう。ただ一つ大きなマホガニー製のシングルベッドを除いては。

黒い音楽家は、部屋に入るとなん自分の荷物をほどきはじめた。

帽子を脱ぎマフラーとフロックコートをハンガーに掛け、暖炉の上に備えているマッチで蒼き火をくべていた。早くベッドで横になりたい様だ。刺青の男は蒼き火がついたのを確認しソファに腰掛けようとしたとき、ドアをノックをする音が聞こえた。

「ジエラール様、失礼します。」と子どもの量ほどの朝食が少女によつて運ばれてきた。ナオミの後ろには小さな用心棒のジョジョ・ダックスフンドがいる。食卓の上にピカピカ光る銀食器に朝食が装われている。ナオミも早く自分の朝食をとりたく、さっさと部屋をでようとしたときお姫に呼び止められた。

「お嬢ちゃん、これは君の朝食だよ」とソファに深く腰掛け声をかけた。

ナオミは入り口付近で立ち往生だ。

「朝食はまだだろ？ 美味しいよ」

だからなに？

「今朝のことは誰にもしゃべっちゃいけないよ、君のためだ。世の中には君の知らない世界もある。もちろん今回のは知らないていい世界だ」と音楽家ジエラール。

なんだ、偽善かと思えば口止め料か。とナオミは思つ。

数秒後「ぐうー」という腹の虫がナオミから鳴つた。

たちまち少女の顔は真っ赤になつた。確かに美味しそうだ。階下に下りていつてもこれほどの朝食にはありつけない。あんな巨大な狼の群れをみたといえ、腹はすぐものだ。第一この音楽家は、魔法も剣の腕も相当なものだ。本当に職業が音楽家なのかは実に怪しいのだが、ただ強いことだけは真実。刃向かつたら殺される。ナオミにも粗末だがそれなりの「ささやかな人生」がある。ここは素直に

「うん」と頷くべきだ。いわれるがまま、すすめられるがまま少女はお客の朝食に手をつけた。

朝食のメニューはほくほくのハッシュドポテト、こんがり焼けた塩味のガレット数枚、それと田舎焼きとローストポークに挽きたての熱々のコーヒーだ。少女はおとものジョジョと一緒に椅子に座つて遠慮がちに食べた。それにしてもこのお客はどうして、こうも自分に親切にしてくれるのだろう。

パチッパチッと暖炉の時きが心を和ませるようにな響く。

少女が食事をとっている間、ジエラールなる黒紳士は、ソファに深く腰掛けたナオミをじっと見つめていた。紳士の観察眼は確かなもので、ナオミは四方八方どこから見ても、誰が見ても本当に汚かつた。瘦せているし、顔色はどことなく青白い。

実際は十一歳なのに、十歳ぐらいに見える。落ちくぼんだ大きな瞳、麗しいというか、彼女の容姿には胸をうたれる何かがあった。身についているものといえば、冬だというのに使いまわされたカーディガンと古着のセーター、一着だけだ。おかみに打たれたと思われる青や黒のあざがところどころにあつた。小さな手はあかぎれだらけだ。靴もぼろぼろだから、足はきっと赤ぎれだらけに違いない。その痩せ細つた体は何とも痛々しい。

パチンッと暖炉の時きが炎と絡み勢いよくはじき飛んだ。

「君に渡すものがある」と靴音とともにジエラールは、背椅子にもたれている少女に近づいてきた。男は山羊革の黒財布から百フラン札を一枚、そつと彼女の右手に握らせた。今まで握つたことのないけつこうな大金だ。

どうしてこんな大金を自分にくれるのだろう？

ジョジョは「ネコババしちゃえ！」と小声で食卓の下から囁き、犬のくせにネコるもの、やはりそういうものはない。少女はお金を受

けどる理由がないと拒むものの、男も頑として拒絶する。音楽家はここまで案内してくれたお礼だといいはつた。

「ところで君は、ナオミ・ニトって女の子を知っているかい？」

少女は心が思わず飛び上がった。大金をもらつただけでも衝撃的だつたのに、今度は自分の名前を聞かされ、少女の心は小刻みに震えた。

なんでこの人は自分の名前を知っているんだろう？

ジヨジヨは知らないといつちゃえ、と目で静かに彼女の足元で合図をする。

親代わりの言葉に従うかのよつにナオミは「知らない」とわざと嘘をついた。内心、この男が怖かつた。ルレスエロ・ジエラールの落胆した顔が脳裏に焼きついた。彼は深く頭をうなだれた。ソファにもたれた音楽家の相当な悲しみが少女にも伝わってくる。暖炉の薪の碎ける音だけが部屋を木靈する。

やはり嘘はいけない。

少女が真実をいおうとした、そのときだつた。「野良！ 野良！」朝食の時間とあつて忙しいらしい。自分を呼んでいる夫人の声が聞こえた。ナオミはかるく会釈をして、音楽家に部屋の鍵を手渡すと黒い扉をパタンと静かに閉めた。そして犬とともに急いで螺旋階段をおりていつた。

午前六時五十分。

台所のカウンターにはずらりとお客たちの朝食が並んでいる。ここでジジ亭の一階の間取りを説明しよう。ヤドリギ家の家紋が

刻印されていいる赤茶色のいかつい扉を開けると、天井の低い薄暗い広間が目につく。来客がすぐ気がつくように玄関扉のそばには衛兵が立つような警備室兼受付カウンターが備わる。受付カウンターの真向かいには、一階と二階に通じる螺旋階段があり、奥にはトイレが見える。

それを少しばかり通り過ぎると鳩時計が壁に掛けている廊下だ。そして廊下をはさんで左右に三部屋づつ仕切られている。手前の右の部屋は、黒い宿泊客も知っている赤い絨毯が敷き詰められた家人用の暖炉の間。かなり大きな部屋だ。向かい側は、暖炉の間と同じ広さでパーティー用の大部屋とも言うべきものがある。

暖炉の間の隣部屋は台所だ。この部屋は宿泊客と家人との共同台所であり、隣の暖炉の間と扉ひとつでつながっている。家人の朝食事はいつも扉は開放されているようだ。

ハレルヤが食卓で牛乳を飲むのが見える。台所の反対側の部屋は、宿泊客用の部屋となつていて、台所の隣部屋、つまり扉から右側の奥の部屋は家人の寝室。そして最後の部屋、左側の奥の部屋は旅籠の書斎兼事務所だ。事務所には黒光りを放つ大きな鋼鉄の重たい金庫がある。

台所の内装といえば、大人が両手を広げたほどどの長さの正方形の木製食卓が六卓ある。年期の入つたものらしく、所々に小キズやスレが見える。この黒い食卓に対して、食卓用の木製椅子が一二脚だ。模様も何も入つておらず味気のないデザイン。部屋は食卓と椅子しかない極めて質素なものといえる。

食卓カウンターは、オーラーク製でどっしりとしたものだ。カウンターから厨房が見えるのだが、この旅籠で一番お金をかけているようだ。銀製の食器や包丁や寸胴などの厨房道具の数々、そして黒胡椒などの調味料、レシピ本がずらりと並ぶ。ヤドリギはデブだけあって食にはつるをそうだ。

台所に急いで下りてきたナオミの顔を見るやいなや夫人は、カウンター越しにいきなり険しい顔になつた。「とにかく泣き虫の甘つたれや、お前はいつから人様の朝食を横取りするよ」になつたんだ、え？」と彼女につめ寄つた。

なんでわかつたんだろう？

ナオミは答へようがなく押し黙つていた。

「フンッ！ いいわけはよしな、お前のほつぺたに食べかすがついているんだ！」

「…あのお客様が食べていって…」

「お前が物欲しそうな顔をしていたんだろ！」

ジジ亭の女将は右手をあげ、いきおいよくふり落とされようとした瞬間、「ホンッ」と小さな咳払いがおかみの耳に届いた。目を周囲にやれば、あの黒ずくめの男ジョーラールが立っていた。

「これは失礼、トイレのついでに食器の後片付けでもといましたね」

黒ずくめの男は女将の右手を凝視したので、夫人はとつさに右手を少女の頭にやつてなでるふりをした。なんともぎこちないしげさと緊張が台所に奔つた。

「」迷惑でしたかな？」

ロエスレル・ジェラールの女将をさぐるよつた声は、どにか憎悪を感じざるえない。

「お客様、困りますわ。この子にそんなことをされでは。まるで私たちがこの子に何も食べさせてないみたいじゃありませんか」

事実なのだが、ジジ亭の女将は体裁をつくらうので必死だ。

「」の甘つたれのチビは、少しでも甘やかすと図のるんですよ」

甘つたれのチビ、この家のナオミのもうひとつのお名前だ。

「それで頼んでおいたパンはどういったんだい？」

「あのパン屋は、あの…」

ナオミはパンのことをすっかり忘れていた。

「すいませんね、パン屋にいくところを私が声をかけてしまってどもる少女にジョラールが助け舟をだした。

「それなら、まあ、いたしかたないことですね。おい、ともかく十フラン返しな！」

ナオミはエプロンのポケットに手をつっこんだが、そこにあるべきものがない。少女の顔がとつさに青ざめた。十フランのお金がどこにもないのだ。

かわりに男からもらつた百フラン札を手渡すのは愚か者がするこ^トだ。

少女は恐怖にさいなまれた顔でポケットをひっくり返したが、十フラン銀貨はどこにも見当たらない。ナオミがゆっくりと顔をあげれば、鼻の穴を大きくした女将は鬼のように見える。いやこれは本^リアル^{アル}物^物な鬼だ。

「盗むなんていい度胸だ」

ジジ亭の女将の唸り声だ。今朝の狼より怖い。

「まったく育ちが悪くていやになるねえ。きなー！」

女将は少女の手をとり、厨房の中へ引っ張ろうとした。するとすかさず「じめんなさい、女将さん！」とナオミの悲鳴が聞こえ、食卓の脚にしがみつき、その場にしゃがみこんだ。女将が少女を無理矢理ひきずるなか、黒ずくめの男が声をかけた。

「その十フラン、これですか？」

男は女将に一枚の銀貨を手渡した。

「先ほどお嬢さんが会釈したときに落ちましてね」

「それなら…まあ、それでいい…ですがね」

女将はどことなく歯切れが悪そだ。

「心優しいお人に出会えて感謝しな。愚図の甘つたれ！ 次はない

からね！」と女将の鼻息は荒くなつた。

少女は「」の不思議な男をじつーと見つめていた。

銀貨はきつと水汲みのときにでもなくしたに違いない、それなのにこの男の人はどういう理由かは知らないが、わざわざ自分をかばつてくれる。少女の大きな目には驚きとともにこれまでにない、男への信頼感ともいえる表情がにじみでていた。

「さて私は一休みさせてもらおう、」
「みるよ」

ルレスHロ・ジエラールはわざと話題を変えたようだ。大あぐびをして一階の自分の部屋へと戻つていった。ナオミにチワツと目配せをして。

「よろしいのですの、あなた？」と暖炉の間で、一部始終を耳にしていたジジ亭の主に不満をこぼした。

「かまわんよ、」

ヤドリギは新聞を読みながらいった。

「今日はクリスマスイブだ、わしも一年に一度は氣前よくなつてもいい日じゃないか」

「九年前、そのあなたの年に一度の氣前さがアイツを<「」の家に招きいたのですわ」

「やれやれ、またその話か…」

ヤドリギのうんざりした口調が聞こえてきた。

会話をさえぎるように牛乳を飲み終わったハレルヤが大きなゲップをした。

ヤドリギの言葉どおり、この日、村はクリスマスイブとあってにぎやかだ。夜には村の名士たちがジジ亭に集まることになつていた。隣の部屋でにはハレルヤが目玉焼きの皿に顔をつっこんで、髪をくしゃくしゃにして寝ていた。食べながら寝ている姿は、もうどこか

らみても立派な小ブタだ。ハレルヤは潰れた黄身を顔にびつぱりとつけて満足そうだ。よだれが黄身に混ざる 気持ち悪い。

ヤドリギは「さすが私の息子、ダイナミックな寝方だ」だと、そんなんわが子を横目でみながら、ある記事にあった。

『サムライ 東洋騎士の腹切りルーツはここにある?』

農場経営者M氏が、ペットのヤギに一万フランの紙幣を、ちょっと皿をはなした隙に全部食べられてしまうというハプニングがあった。百フラン札を百枚用意、テーブルのうえに置いていたそうである。

電話が鳴ったので彼は現金をそのままにして、ダイニングキッチンからでた。五分ほど電話で話したあと、キッチンに戻つてみると、あらうことか雌ヤギのミシエルが今までに、最後の新札を食べ終わるところであった。M氏は即座に獣医を呼び、ヤギの緊急開腹手術を依頼した。

「お金のほとんどは取りもどせましたよ、ミシエルにとつても辛い教訓だったがね」

獣医は手術代として、ヤギのお腹から出てきた湿つてグチャグチヤになつたお札のうち、五枚を差し引いたという。

我々も笑いごとではない。ブルターニュ地方・ふくろう党では温暖化対策のための予算確保の最有力手段として、新聞の廃品回収事業の撤退を要求している。来年の今頃、人々は一家に一匹、ヤギを飼わなくてはならなくなりそうだ

追伸 三日前にモン・サン・ミッシェルから脱獄した、サンチョ・ボブスリーは当局の捜査をくぐり抜け、今だ捕まらず。用心にこつけたことはないと思われる。

ヤドリギはうんと唸り、悪態を思いつくだけいうと新聞を黒い革の型押し鞄にいれて、仕事の用意をはじめた。廊下の壁掛け時計からはポツポー、ポツポーと鳩時計が聞こえてくる。午前八時の合図のようだ。

「町の連中どものところに、今晚のパーティーの挨拶についてくるよ」

ヤドリギは夫人の頬に朝のキスをし、ちょっと田玉焼きの味がするハレルヤの頬にもキスをした。

ナオミには「へらへらするんじゃない、目障りだ！ あっちへ行け！」とキスのかわりに一喝した。別に慣れてるからへつちゃらだ。（それでもあの黒ずくめの男、どこかでみた気がするがどうも思いだせない）

ヤドリギは腑に落ちないまま、我が家をあとにした。夫人は化粧のために寝室へ、なんと一時間と二十分もかけて化粧をする。それがまたものすごい厚化粧のため、ナオミはお面をつけているかのように思えたが、夫人の往復ビンタが恐いというのか、痛いので言葉にだすことはない。特に今夜はジジ亭でパーティーがあることだから、より念入りに仮面作りに励むのだ。

化粧をすませたヤドリギ夫人は、汚物を相手にするかのようにナオミをキッと睨んだ。

「私は美容院にいつてくるからね、帰つてくるまでに部屋を片づけておくんだ。それから洗濯物もほして、床掃除と皿洗いもしておくんだよ」一思いにそれだけいうと、ヤドリギ夫人は、ハレルヤ坊やと共に近所の美容院へでかけてしまった。

鳩時計が午前十時をナオミに知らせる。

ナオミが床掃除を終わらせ、暖炉の間をでようとした瞬間だった。ドサツ、誰かが窓に雪だんごを打つけた。

まつたくどこの誰だ、ガラスが割れたら、女将に怒鳴られるじゃないか。

窓の外には赤いセーターに毛糸のインティゴのジャケットを着た、少年が手をふっていた。

黒デニムのオーバーオールがかっこいい。深い青のニット帽をかぶっている。手にはなめし革の手袋をしている。少年の名前はテル・ウォ・アボカド、ナオミの親友だ。犬以外の。

しなやかなサラサラの茶髪、美しい緑の瞳。色の白い肌。そしてバカ正直な性格、わがままなところがたまに傷なのだが、ちょっとぴり頼れる同じ歳の少年だ。自分に想いをよせていることは女の子だから、すぐにわかるものの、テルは彼女にとつてただの男の子にすぎない。そんなテルもジョジョ・ダックスフンドと会話ができる。ジョジョと会話を交わすことができるということは、お互いが心許せる仲であるという何よりの証拠だと思つていい。

暖炉の間の窓を押しあげて、少年にどんな用事かと聞けば、興奮しながらあのダ・カーポから電話をもらつたんだあ、と少年は頬を紅潮させながら胸をはつた。「ダ・カーポが！」とナオミは驚嘆した。電話の内容によると空間移動魔法で例の場所とダ・カーポ邸とをつなげているからナオミに早く来いのこと。

ダ・カーポ、この辺では「魔女の血を受け継ぐ者」として知られている。

噂どおり若干魔法も使える。彼女が少女に会いたいらしい。ちょうどいい。最近、ナオミは魔法を習うために魔女に会いたくても、仕事が多忙らしく門前払いの日々が続いていたからだ。その彼女から会いたいという電話があつたのだから少女は喜びが隠せない。「あの魔法を使う謎の音楽家が、彼女の知り合いかどうかも確認できる絶好のチャンスだわッ！」

少女は彼女のところに行くことにした。

どうせお昼まではきっとヤドリギ夫人は帰つてこないのだから。少女は支度を整えると犬とともに外に出た。テルも魔女から女を守るのは男の役目だといい、好きな女の子と一分でも一緒にいたいのか、ナオミと魔女の屋敷に行くことにした。

「で、アイツは誰だい？」とテルは白い息を吐きながら、二階の窓際から自分たちを密かにのぞき見ている、例の男をみて、うさんくさそうに少女に尋ねた。ナオミのかわりに「人らしい」とダックスフンドが返事をした。

第5話

考古学者、ダ・カー・ポと会いたい人は、五年前から予約を入れないと無理といわれるほど、彼女は大変人見知りが激しいことで知られる。その理由は明らかに彼女の著作にあると言つても過言ではない。ダ・カー・ポが六年前に出版した『古代魔法のすすめ』がミリオンセラーになったのがきっかけで、彼女の仕事が評価され、より魔女は仕事に没頭した。よつて引きこもり癖はさらに悪化したのだ。少女がそんなダ・カー・ポに呼ばれているなんて世界の考古学者たちが知れば、いったいどんな顔をするだろう。

ところでこの魔女の屋敷へ行くには、普通に町の路地といった生活道路では辿り着くことは決してできない。

確かに肉眼では屋敷を確認できるのだが、途中で通路が別の場所とつながり、屋敷に辿りつくことができないのだ。そこが彼女を魔女と呼ぶ所以であり、カンペールの生きた伝説ともいわれる。それゆえダ・カー・ポ宛の郵便物などは、彼女が直接取りに行くことになつているのだ。しかも人通りの少ない真夜中か早朝にひつそりと彼女は荷物を受け取りに行く。理由は定かではない。

しかしナオミとテル、そしてジョジョにはダ・カー・ポと面会できる秘密の入口がある。だから心配ご無用だ。それは偶然、二人が西はずれにある、カンペールの森の近くの共同墓地を探検していたときには発見した秘密の通路だ。西はずれの墓地は近くにある原始林の影響もあつてか、一年中、濃霧に包まれている不気味な場所だ。原始林と同じ陰鬱な空気が漂い、町の人は墓守の任務以外は近付きたがらない場所もある。不気味な声を放つ鳥や野良犬の溜まり場だ。

今から一年前の冬だったと思うが、墓守の任務でテルのご先祖の墓掃除を終えたあと、ついでだからと墓地を冒険していたとき、野犬に遭遇した一人と一匹は、必死の思いで墓地のなかを逃げまわり、墓守の小屋に命からがら逃げこんだ。それが秘密のはじまりだった。墓守といつても、正式にこのカンペールにそういう職業の者はいない。大聖堂の任意を受けてカンペールの自治会が、週に一回の割合で町の衆、といつても家族単位（もちろん子供は数には入らない）であるが小屋に泊り込みで墓を清掃するのだ。無論、気持ちほどではあるが教会から、わずかばかりの駄賃が支給される。ことはアボガド家の当番の時に起きた。

「テル！ あそこよ！ あそこに逃げ込みましょー！」

子供一人と犬は命からがら小屋の腐りかけの木製扉を開いた。小屋のなかに一步踏みだした瞬間、ナオミは悲鳴をあげた。

「どうしたんだい？」テルの声だ。

「う、うん。なにか……いる、私のお尻の下に……」

ナオミは何か大きなベチャツ、としたものを踏んでしまったようだ。

「一体全体なんだ？」

少女はふるふるとふるえている。とすぐにお尻の下から「……そ、それは私ダ・カーポですわ……お一人さん」と彼女の苦しそうな声が聞こえてきた。いやはや大きくてベチャツとしたものはダ・カーポ、その人だつた。

考古学者ダ・カーポの美しい容姿は、今でも忘れられない。

声は甲高く甘えたような声、象牙のような乳白色の肌。細身で長身、背丈は百八十センチほどはある。みずみずしいカールのかかつた黒髪は、両肩からその豊かな胸までかかる。薄いピンクの唇に淡

い頬そして白い歯。綺麗に整った長爪にピンクのマニキュアが可愛らしい魔女のお姉さまを演出させる。

細い眉毛にラメによるアイシャドーの目は大きく見開き、見る者を一瞬ドキッとさせてしまう。両耳を彩るピアスは、金の装飾に大きな黒真珠が揺れている。彼女の首を細く美しく見せる黒真珠のネックレスに、ヒダの付いたのウールの白いセーターが対照的で魅了される。

靴は赤いリボンの房が付いた光沢のある黒いハイヒールブーツを履き、実際の身長は175センチ前後だろう。二ツの濃紺のショートパンツと、アメリカ先住民がデザインしたような幾何学柄の毛織のカーディガンを羽織っている。

二人は大慌てで、考古学者の背中から飛びおりた。

「本当に、本当にあのダ・カーポ先生なの？ 伝説のカンペールの住人ッ！」とテルが驚く。

「ノンノン！」

ダ・カーポは人さし指をたてていった。

考古学者はパンパンツと身なりを整えながら、すぐ後ろの扉を指さした。振り返つてよくみると内扉は金装飾が美しい重厚なオーケ製の赤い扉だ。この扉は外側と内側と居場所が異なる「開かずの扉」という魔法の扉らしい。しかもこの豪華な赤い扉には銀のプレートが貼られており、こんなことが書いてあった。

「『開かずの扉』 N.O. 289876549」

ブルターニュ地方

フィニステール県南部 カンペール

西のはずれ、原始林の手前、カンペールの墓守小屋

内容は思いつきり怪しいものの、そこの窓からみえる風景に一人と一匹はなぜか見覚えがあつた。

あそこにあるとんがり屋根の大聖堂と尖塔、歴史を感じさせる中世の旧市街、美しい家々が並ぶフレロン通り。通りに見慣れた人がいる。ヤドリギ一家だ、ハレルヤ坊やはなにかを買ってもらつて嬉しそうだ。間違いない。ここはカンペールのダ・カーポの屋敷だ。内装からして実験室なんだろう。フラスコや奇妙な動物の剥製や頭蓋骨、人体模型がおいてある。

少女たちの目の前には難しい魔法の哲学書っぽいものが、大きな長方形の書棚にずらつと並んでいる。勉強嫌いのテルにとつては、じつに重苦しい光景だ。天井も側壁もすべて灰色のレンガで覆われており、床は大理石だ。とても生活臭たるもののが漂つてこない。部屋の奥まで見通すことができず、なんとも細長い実験室なんだとテルは驚きが隠せなかつた。実際のダ・カーポ邸の外観よりも、屋敷の中は何十倍も広いのだ。これもダ・カーポの魔法の一つなのである。

ナオミはどうなつているのかわからず、きょとんとしていた。
「墓守小屋は、ダ・カーポのアトリエと空間移動魔法でつながっていますの、諸君」

魔女は静かに語る。

彼女の説明によれば、ここのはすべての部屋は扉の文字で記されている場所に直接につながつており、そんな摩訶不思議な部屋がざつと五十部屋、禁断の扉が十五部屋ほどあるらしい。この空間移動魔法はダ・カーポが復活させた古代魔法だ。うつかり開けるものなら、帰れなくなる場合があるので注意が必要だとか。まだ実験段階中のため、考古学魔法学会にも発表はしていない。これが魔女つまり考古学者ダ・カーポと一人と一匹の最初の出会いであり、この日から彼らはダ・カーポの良き実験相手となつた。

衝撃的な一年前のこと思い出しながら、ナオミたちが墓守小屋から部屋にはいると、みるとみるつちに真っ暗な廊下に明かりが灯された。

大理石の床、いや廊下に近いのだが赤い絨毯がどこまでもひかれおり、その先がまったくみえない。五歩ごとに同じような赤い扉があつて、各自のかけには「ミスリル鉱山の炭坑扉」とかいろいろ書いてある。クリスマス前夜祭とあって、扉と扉の境目には燭台以外に樅の木が飾られていた。赤いキャンドルにゆらりと小さな聖なる火が灯され、おなじみの黄金の鐘と華やかなイルミネーションの飾り。ここには内装こそが若干の変化はあるが一年前の実験室のようだ。

「今度はどんな実験かしら？ それよりジョラールさんについて伺いたいのだけど」とナオミはひそかに齎えた。最近の魔法実験といえば一年前ほどの話だが、ヤドリギ夫妻を呪い殺す呪文を教えてもらいう代わりに、禁じられた黒魔法『カメレオン』という魔法の再現だつた。

互いの心と記憶を入れ替えるという魔法で、数分だけナオミとテルの身体を入れ替わる禁じ手だ。実際に身体を入れ替わってみれば、テルは女の子の身体に戸惑い、ナオミは何だか、股間に違和感を感じた。

噂のダ・カー・ポはせかせかと忙しそうだ。

「ノンノン！ 今回は人体実験じゃなくて、飾りつけのお手伝いよ、実験といつたら実験だけね」

ダ・カー・ポはナオミを見た。

「あらつ、ボーアフレンドも一緒にきてきちゃつたのね」

「そ、そんな、そんなんぢやないですッ！」

ナオミは顔を赤らめ、そんなん呼ばわりされたテルはどこか不満

そうだ。

二人と一匹の田の前には、青々と茂つた巨大な樅の木があつた。高さは大人3人分ぐらいはある。突如、魔女ダ・カーポは子供たちに一つの質問をした。

「さて諸君は、サンタクロースは信じますか？」
子供たちの答えは聞くまでもない。

縁といえば赤、赤といえばリンゴ。大昔からクリスマスツリーにはリンゴが不可欠、でも今年は良質の赤いリンゴが手にはいらないそうだ。やっぱリアメリカ風のポップコーンでは、いまいちしっくりこないとか。高級なアルザス産の樅の木には、やはりそれに似合つた飾りが必要だと、考古学者は変なところにこだわる。

「もうまつたく！ 肝心なときにかぎつて、助手のエンガチョがないんだから！」

エンガチョとは彼女の部下であり雑務係だ。主に郵便物の受け取りや電話の応対などが彼の仕事だ。それゆえダ・カーポはかつて男だと思われていた。魔女ではなく魔法使いだという噂があつたほど。

「僕はポップコーンでもいいよ」とテルはクリスマスツリーに飾つてあつた、一週間前のパサパサのポップコーンを食べていた。ジョジョもクリスマスツリーにしがみつく。

「ですが、それも今日で解決済み、ようやく解明なの。この七日間、樅の木を見るたびに苦しかったわ」とダ・カーポのあきれ顔。ダ・カーポの解決済みというのは、三日前にとある町の競売で競り落とした鍊金術で練成したリンゴが今日届いたそうだ。出品者の『ロベルト・パパティーノ』は、新進気鋭の鍊金術師で知られ、その作品群は収集家たちのなかで大変人気があるそうだ。

そんな矢先だった。ミシッ、とナオミは赤い扉がきしむ音を聞いた。

誰かが自分の手をひっぱつているようだ。

「ねえ、テル。なに？」

ナオミが迷惑そうに尋ねれば「なんのことだよ」と怪訝そうナルの顔。

確かに誰かが彼女の手をぐいぐいつてひっぱつている。テルじゃなければ誰だろう？ と後ろにふりむけば、扉のすきまからいくつもの目がみえ、そこから手が伸び、ナオミの手をひっぱつているではないか。思わず少女は悲鳴をあげた。

扉の隙間、暗闇のなかに光る一つの目とナオミは目が合つてしまつた。

「アタシ、ハナコ・ゴースト。イヒヒヒヒヒ！ 生きている人間ツ子が憎い！」

ジョジョは低い唸り声をあげて、爪と牙をむきだしで飛びかかる。魔女ダ・カーポは「エンガチヨの閉め忘れですわ」と勢いよく扉を閉めた。

バンッ！ と犬はドアにぶち当たり、半ば死にかけだ。テルといえば腰がぬけてしまつたらしい。まったく動けなかつただけでなく、情けないことに半べそ状態だ。おしつこを少し漏らしたのかもしれない。股間の部分に恥ずかしい滲みがにわかにできている。ナオミはぶるぶると震えがとまらずにいた。今朝の狼に続いて二回目だ。「カーボネット城のゴーストたちのいたずらですわ、お気になさらないように！」

ダ・カーポは息づかいを荒くした。

この赤い扉の銀のプレートには「ブルターニュ地方、森のアルゴート、アッパー・タウン、迷いの森のカーボネット城」と記されていた。

そんな二人と一匹におかまいなく、自分は調べものがあるからと「ナントノブルターニュ大公城跡、ナント歴史博物館への扉」という扉に手をかけ、奥の扉へとゆらりと姿を消してしまった。

「ダ・カーポさんの用事つて何だつたのかしら?」とナオミ。

「父ちゃんがいうには、考古学者は昔から変人とバカが多いってさ」テルにいわれては世話がない。そのすぐ直後、先ほどの扉が勢いよく開いた。

噂の変人のダ・カーポだ、すでに彼女の腕にはぎつしりと何十冊もの本が積まれてあつた。

悪口が聞こえたのだろうか　　すると考古学者のような本、本のような考古学者は二人に話しかけてきた。

「そうそう忘れるところでしたわ」

二人と一匹をわざわざ呼びだしての緊急の用事というものは、届いたばかりのこのりんごをアルザス産のクリスマスツリーに飾りつけてほしいとのこと。話の内容によると、これも実は鍊金術の魔法の実験の一つらしい。ただこの実験には、クリスマスの聖人を信じる子供の純粋な魂が必要だということ。世俗的な大人や魔女ひとりだけでは、実験はできないのだ。

「おー一人さん、アップルパイは嫌いじゃなかつたですわよね?」

甘つたるい声でダ・カーポはテルを誘惑する。

「僕らをアップルパイで買収するきだな」とテルは、ダ・カーポの唇に心を奪われた。

実験後のりんごの将来は、まっすぐアップルパイになる運命にあるようだ。二日後とみていいかもしれない。テルはそんなものでは絶対に手伝わないといわんばかり。彼女に関わるところなことがないからだ。魔女は持っていた鍊金術のりんごを、そつと少女に手渡した。

「あらつ、テル・ウォ・アボカド。先ほど誰が賢いですって？」

ダ・カー・ポの不気味な笑みが恐ろしい。

「アップルパイです」と先程の悪口をおもく後悔した。

「素直でよろしい」

テルを説き伏せたダ・カー・ポは優越感にひたりながら、すぐに扉を閉めた。

一人は唖然としていた。ナオミは、黒き音楽家のことを聞き忘れたことを後悔し、テルはアップルパイで妥協した自分が悔しくてたまらないかのようだ。ジョジョは静かにしつぽをぱたんつとふつていた。

しばらくして少年がなんとか樅の木によじ登り、リンゴの飾り付けに成功した。

その時、少女たちの耳にはサン・コランタン大聖堂のお昼の鐘の音が聞こえた。ナオミはヤドリギ夫人が美容院から戻つてくる前に帰らなくてはいけないことを少年に告げた。

「今夜はジジ亭で町のお偉いさんが集つてパーティーがあるの、その準備をしなきやつ！」

テルはクリスマスの前夜祭というのに仕事のある少女に同情し、ジジ亭の向かいにあるブルトンパブで、彼女の勤労を祝し料理をおごることを約束した。そして二人は互いに来た扉をあけ、ささくさとそれぞれの持ち場に帰つていった。

第6話

クリスマスの前夜祭に晩鐘が町一体に鳴り響く。その鐘音は今日一日をよく働いた者には、やさしく包み込み、道楽者に対しては静かに「懺悔」を促すよりも聞こえる。寒気のなかサン・コランタン大聖堂の鐘楼がモノトーンに沈み、町の商店街は一気に魂が抜けた。まるで町はクリスマスの聖人に贈り物への感謝の祈りを捧げるかのように静謐だ。

午後六時三十分。

ジジ亭の真向かいにある、生糀のブルトン人ニコレット氏が経営する『山荒し』^{ハリネズミ}は、歴史ある黒瓦のトタン屋根のブルトン人のパブだ。「山荒し」と書いたオーパーク製の立て看板が店の前に置かれている。看板にはニコレット氏なのか、店の名前その他にデフォルトされたチョビ髭面の中年男とビールのジョッキが描かれている。暗闇の中、酒場から漏れる光が人の心を癒す。

「山荒し」たる建物の外観は、横長の長方形の上に二等辺三角形をのせた形だ。建物の上部屋根の黒い鉄製の煙突の部分には、薦なのか苔なのかよくわからない雑草がびっしりと生い茂り、一種の森となっている。

建物の中心に正面玄関たる華麗な檜製の細長い扉がある。扉の上部はアーチになつており、そこに流れるように店名が刻印されている。この青緑の扉はステンドガラスで装飾された開き戸で、開ける度にドアの上部に取り付けてある黒いベルが来客を告げる。扉の前には苔のはえた石の階段があり、数えるところ四段。木製の扉を中心には、赤ワイン色のペンキを塗ったマホガニー製の八本の

円柱が等間隔に飾られている。その間には大きなガラスの飾り窓が四つあり、向かいのジジ亭を数名の酔っぱらいがパブの中から眺めている。建物全体は黒いレンガで作られており、赤い円柱と見事な色合いを醸し出す。

ニコレット氏の酒場^{パブ}には、連日わいわいと町の人々、ブルトン人たちがここにブルトン語を求めてやってくる。そんなことはじつはどうでもよくて、酒場にはいろんな噂が飛びかつた。店員もペチャクチャと噂話。店の主人もペチャクチャと噂話。お客様もペチャクチャと噂話。でも誰かが本当のことを聞きたいときは、この店には来ないのだった。

高級木材のマホガニーで内装された石造りの酒場は、夜となるとランプの灯火の影響もあり、パブは小麦色一色になる。酒場の空間は入る者によれば黄金に包まれた宮殿とも言い表すことができよう。酒場は、ざつと大人が五十名から六十名ぐらい余裕に入れる広さだ。間取りはもちろん外観と同じく長方形だ。青緑のステンドガラスの扉を開けると、すぐに目に付くのは、奥に設置されている卓上部分が大理石で作られた巨大なバー・カウンターである。バーテンダーが入ってきたお客様とすぐに挨拶をかわせるように設置されている。

カウンターは酒場の左右に横長に一直線にのびている。カウンターとともに脚の細長い天然木のスツールが、ざつと二十脚ほど置かれる。台座は黒い革で作られている。カウンターの内側にはオーダー製の電話に、ずらりとフランス産のボルドーワインや白ワイン、外國産のウォッカやスコッチ、ウイスキーなどの酒瓶が、酒棚にグラスと共に綺麗に整列している様は壯觀だ。そしてカウンターの上には鍍金の蓄音機がある。

バー・カウンター以外に目に付くのは、左右におかれた木製の円卓のバー・テーブルと天然木のスツール三十脚。バー・テーブルは直径二

メートル程あるもので、ざつと十台はある。各テーブルには、高さの150センチの革製の仕切り壁で区切られている。またワインのがビールなのは分からぬが、酒樽が左壁面にピラミッドのごとく三段に積まれ、それを監視するかのように直径1メートルの丸い白の合金の鳩時計が左壁に吊るしてある。時計の数字は、アラビア数字ではなくルーン文字なるルーン数字が刻印されている。右側の壁面には、時間の番兵ではなく百獸の王の剥製が容赦なく酔っぱらいを見下ろす。

ジジ亭側の窓際には、金の刺繡をあしらつた重たいカーテンが外気から内部を守っている。寒さといえば、黒い鋼鉄製の薪きストーブは忘れてはいけない。右側のジジ亭寄りの窓際のレンガ台の上にそれは設置されている。煤だらけの四角い姿をしており、薪きを焼べるその大きな口は、まるで蒸気機関のボイラード。空気口から垣間見ることのできる薪きが燃焼していく様は、ときに酒飲みを夢の世界へ誘う。細長い煙突が天井へ一直線にのびる。そして極めつけは、クリスタルガラスの巨大なシャンデリアだ。酒場の様々な色彩が乱反射して美しく光り輝いている。

酒場は前夜祭とあって、カウンターの左隅の酒樽の傍に、大人の一人分ほどの高さのクリスマスツリーが置かれている。右隅のバーテーブルではワイナリーの農夫たちが、おいしそうに塩味のガレットをつまみにして、シードルを静かにちびちび飲んでいた。カウンター席では人のよさそうな大きな男の人人がこの店の看板娘と話をしていた。

ちよつと右に離れたカウンター席ではパイプをゆつたりと吹かしながら、日刊新聞「毎日ブルトン新聞」を得意そうに読んでいる老人がいた。右一番隅の暗闇に隠れてシードルを飲んでいるのは今朝一番で、この町にやつてきた真向かいのジジ亭に宿泊している例の音楽家だ。

『山荒し』^{ハリネズミ} の黒いベルが静かに鳴つた。

ナオミとテルが店にはいると、とたんに会話は静まつた。酒場の皆はテルを知つてゐるようだ。なかにはニタツと無気味な笑いを浮かべる者たちもいた。少女をみて看板娘のサンタマルタは、カウンター越しにそこに並べてあるグラスにゆつたりと手をのばして「二人とも、牛乳でいいかしら」とからかつた。

突然、店内に爆笑が沸いた。

喝采の中、二人は顔を真つ赤にさせながら、小太り男の横のスツールに座した。足が床にどどかなく、二人とも両足を行き場なくぶらぶらとさせている。少年と少女の間で犬がどぐろをかくように床に寝そべつた。しつぽをパタンとひと振り。

サンタマルタは町の孤児院に、いつも月末に寄付をしてくれるとても心がきれいな町娘だ。彼女もナオミと同じで親がいない。このブロンズのショートカットの女性は、まつ毛が長く青い澄んだ細い目がとても印象的だ。細くもなければ太くもない姿が、酒好きの中年男性の心を魅了している。

白い絹のエプロン越しに想像ができるその豊かな胸も人気の理由かもしねりない。笑顔が素敵で、微笑むと八重歯が綺麗だ。声は明るく弾み、はつきりとモノを言う口調が、私の人生は男なんぞには頼るものかという姿勢をじみ出す。バロック真珠と金製の人魚をデザインした耳飾りがとても似合う。赤いエナメルの靴に白いブラウス、黒に銀の刺繡が入つたスカート。ナオミが憧れる町の女性の人だ。

サンタマルタはナオミにニコッと微笑だと、二人に甘酸っぱいアップルサイダーを作つてやつた。少女に「今日のパーティーの準備は、もう終わつたの?」と尋ねれば、ナオミのかわりにテルが答

えた。

「うん、今さつき晩餐の仕込みが終わつたらしいよ、パーティーは九時だから、八時半には戻ればいいってさ」と少年は、少女の勤労に祝して料理をおこることを看板娘に伝えた。

少年にとつてこの大好きな少女に、夕食をじこ馳走することはこの上もない栄誉なのだ。だがナオミは、そこの右隅で飲んでいる謎の男から今朝一百フランをもらつてゐる。実はこの少年よりもずっとお金持ちなのが……。彼女は、この一百フランをすぐに使わず大事な時まで、貯金するつもりだ。

「ところで、今日は絵描きのグッドウィル画伯とは会わないのかい？」

看板娘に太つた男はさりげなく、話の続きをはじめた。

「絵のモデルは明日よ、エンガチヨ」

サンタマルタはどこか嬉しそうだ。

「フンッ！クリスマスデーートかい！」と、背丈二メートルほどの大男は悪態をついた。

エンガチヨ、この小太り男の職業は申し上げるまでもなく読者はお分かりだらう。

そう魔女ダ・カーポの助手だ。仕事をサボり、どこをほつき歩いてゐるかと思えば、彼はこの酒場に昼間から入り浸つていたのだ。いや雑草のように一輪の花をお皿當てに根をはつていて表現すべきか。

容姿は、白いものが混じつてゐる黒の長髪に、無精髭と厳つい揉み上げの面構え。ほりの深い灰色の目が油断はできない無頼漢を思わせる。黒豹の毛皮にどこかの一流ブランド品であろうと思わせる上質な紳士服。淡いピンクの絹のシャツにタータンチェック柄のベスト、赤いネクタイ。そしての合金の雄羊を型どつたカフスボタンを身に付けてゐる。四つボタンの優雅なインディゴの上着が、着こなすものを上流人に思わせる。小太りでなければ一枚目のプレイボ

ーイとして、さぞや評判になつてゐるにちがいない出で立ちだ。

クリスマスといえばサンタクローズだ。不思議なことにサンタマルタには毎月、決まってミスリル金貨三十枚を送つてくれる足長おじさんがいる。そのおかげで生活には困つてはいない。同じ親なしといえども、ナオミとは根本的にそこが違つていた。つまり彼女は親の愛情に恵まれてはいないものの、貧乏ではないということだ。

エンガチョたる小太り大男は「あの人たぶん、君のことが好きだと思うんだな」と画家に気をつけるよともいつよいに警告した。サンタマルタは下衆の勘ぐりはやめてとつよつに「うーん、どうかしらね。でもとつても優しい人よ」と受け流した。それでもこの小太りの酔っぱらいは看板娘にしつこく忠告する。

「そりゃい、俺つちは大嫌いだな。この人参もだけど……」

エンガチョは本当にグッドウイルという人が小憎らしいという感じだ。だけどナオミはこんなところで、仕事をサボつているエンガチョが本当に小憎らしい。話のネタがつきたのか、太っちょのエンガチョは鼻を鳴らし、バター葉巻きを注文した。

「おい、わん公。人参でも食うか?」

(こらないよ) とジョジョはブイツと横をむいた。

サンタマルタは「二フランよ」といつて、エンガチョにバター葉巻きを手渡せば、彼はさつそくそれをぶかぶかとうまそうに吸いだした。まわりはバターのいい香りがただよつてくる。テルも父親からの頼まれごとを思い出したらしく、エンガチョの吸つているバタ一葉巻きを二本注文した。

バター葉巻 それはブルトン社会の魔法文化遺産だ。

通常の使用されるタバコ葉とは違い、特別の葉を使つた葉巻タバコだ。火を付けると香料が魔法により化学反応を起こし、バターの

香ばしい匂いと味が、吸う者に至極の楽しみを与える。健康には一般的の葉巻と同じぐらい害を与えるそうな。このタバコは、ブルトン人のとある企業が製造しブルトン人社会のみに小売販売している。なお製造方法は企業秘密だそうだ。予備知識だが灰は、スープの調理料としても使われる。ジジ亭の本田の晩餐会でも使用されている。

「まだ未成年なんだから吸っちゃダメよ」

バター葉巻を三本手渡しながら、サンタマルタは憂う。「吸わないよ、たぶん。それでいくら?」

「五フランでいいわ」

「でも黒犬が吸うかも。このダックスフンド、不良だからね（…鼻でもかじってやるのか?）」ジジョジョはボソボソ呟いた。

ちょうどそのときカウンター席の今では昔懐かしい、オーラでできた高級ゴシック電話機が皆の注目をあびた。電話はジリジリーンとやかましい音をたてた。

「はい、じゅり『山荒し』です。ええ、息子さんのテルくんですか？」

サンタマルタはチラリッと少年に目をやった。

「うちの父ちゃんだ。帰りが遅いから怒っているんだ!」

テルの顔は青ざめた。

「いいえ、もう帰りましたよ。お金を忘れてるって? 『心配なく葉巻代はいつもどおりつけておきましたわ。あれつ、電話が切れちゃってるわ。すぐにアボカドさんは都合の悪い話になつたら電話を切るんだから』

看板娘サンタマルタはふりふり怒っている。

「俺が払つてやるよ、テル。ほれ、五フランだ。先生のおもり代なんだな。どうせ恒例のリンクの飾りつけだろ? お前たち前夜祭に素晴らしい魔法の実験ができてよかつたな。俺に感謝しろよ」

酔っぱらいエンガチヨはテルのかわりに代金を支払つてやると、

わが恋敵とばかりに、グッドウェイル画伯の文句をぶつぶつといながら山荒しをあとにした。

ポツポー、ポツポー、ポツポー。

白く円い合金の鳩時計が真夜中の八時を告げた頃、オーナー支配人でバー
テンのニコレット氏が少年少女を睨みつけた。

ニコレット氏。この壯年は頭がハゲているが、身体はエンガチヨ
と変わらずにデカい。支配人というほどあつて蝶ネクタイにサテン
の燕尾服を身に付けている。黒の革靴がオシャレだ。酒場のギャル
ソンとしては、その礼儀正しさがブルトン社会で有名だ。多くの酒
を愛するブルトン人が信頼をよせる酒場のオヤジさんなのだ。
支配人は「八時だぞ！」とテルにギロリッと鋭く言葉の刃を突き
刺す。

「さあ、帰った、帰った。子どもの時間は終わりだ！」看板娘も少
女に同情しながら「さあ、晚餐会に支度に戻つてナオミちゃん」と
少女を励ます。

まったくそのとおりだ、一分でも遅れたらヤドリギ夫人の往復ビ
ンタが待つていて。うたた寝していたダックスフンドは、めんどく
さそうによれよれと、二人についていった。

子どもたちがいなくなると店内の雰囲気はがらりと変わり、一氣
に寂れた感じになつた。酒場というものは人が居てこそ息をする、
とブルトンの古の諺もまんざらでもない。

「…あの子たちはブルトン人だろ？ どうしてでかけない？」

声の主は黒ずくめの男、ロエスレル・ジエラールだ。

「でかけるつていうと、その…騎士の見習いですかい？」とニコレ
ット氏はぼやいた。

「それがブルトン人の伝統じゃないか…」

騎士の古いしきたりで騎士になる子は、十三歳の誕生日までに騎士の従者として独り立ちしなければならない。でもその年での独り立ちは今の世の中にはあわず、年々その伝統は廃れつつあった。ブルトン人の世の中も変わりつつあった。

歴史を紐解き、さかのぼること数百年ものブルトン民族物語。サーガ

今やブルターニュの人々が働く場所が、ブルターニュ地方株式会社と呼ばれる。それは名前を変えた白の公国ブルターニュといつてもいい。社長のアーサー・ブルトン歴代公爵といつても、世襲で本人が名乗っているだけにすぎないものの、ブルトン人においては大きな意味をもつていた。

ブルトン人とは『アーサー王と円卓の騎士団』を先祖に持つ、フランス人のことだ。彼らがフランス西部に白の公国ブルターニュを建国したのは一千年前といわれ、歴史的にブルターニュ地方は、フランスとは違う独自の文化を育んできた。ブルトン人は先祖の遺産として受け継いだケルト伝統の音楽と文化、そして『アーサー王と円卓の騎士団』の社会秩序を誇りにしている。

その領土は常にイギリス王国とフランス王国に狙われ、十六世紀には公国としてフランスに併合された。隣国に併合され、国としての地位は奪われても、白きブルターニュ公国領の領土と歴史は、その子孫たちに脈々と受け継がれていった。

やがて時代は大きく転換した。フランスに革命が起きた。

俗にいうフランス大革命である。革命後、フランスが王制から共和制へと変わっていくなかで、フランス国王がその領土と身分を失つたように、ブルターニュ公爵もその領土と身分を失うはめとなつた。もはや公爵とは名ばかりにすぎず、公爵領などはながら存在しない没落貴族となつた。

そんな滅亡の危機にあつた公爵家を救つたのが、現公爵の祖父ア

－サー・ブルトン十六世だ。青年実業家でもあつた公爵は人々に呼びかけて、一風変わつた名前の不動産会社をつくつた。それがブルターニュ地方株式会社だ。ブルトン人のなかでは通称「ブルトン政府」と呼ばれる。

ブルトン人たちは公爵の呼びかけで、ブルターニュ地方株式会社に自分たちの土地を預けた。とくに大きな土地を預けた領主たちはその大きさから市長、町長、村長とよばれる領地、土地の経営者となつた。また彼らも公爵を見習つて、自分たちの領地を株式会社にした。

こうしてブルターニュには多くの株式市町村が誕生し、ブルターニュ地方株式会社はブルターニュ地方のほとんどの土地を所有する大手不動産会社、財閥となつたのである。彼らはいち早く古い国家概念を捨て去つた、新しい国家を作つたともいえよう。これに伴つてフランス語が彼らの公用語となつた。民族の言葉「ブルトン語」は野蛮な過去の象徴として、フランス政府から捨て去るべきものとされた。

「コレット氏はグラスをキュッキュッと磨きながらいった。

「今じゃねえ、お客様。危険だからといって見習いをやらさない親もいるんですよ。最近の子どもはブルトン語もろくに喋れなくなつてますしね」

ブルトン語は自分たちにとつて文化と歴史そのもの。またブルトンの騎士道は自分たちの社会秩序そのものだ。現在、ブルトン語を喋れるブルトン人は二百万人、そのうちブルトン人社会で生きることを選んだのは五十万人だとか。

「ブルトン語を失えば、我々はすべてを失う。このままでは百年後、ブルトン人がブルトン語を喋れない世界がやってくるだろう。まったく世も廢れたもんだ」とジエラールは世の不条理を呪うよう

に、吐き捨てた。

「で、お姫さん。お探しの女の子は見つかったんで？」と「コノシトエビ。

男は皿をつりすりと細め、「…手遅れだった」と意味深に呟くといなや、ブルトンパブ『山荒し』をこれまたつるさんべやつにでていった。

「」の謎の音楽家とわずかに擦れ違いに鋼鉄製のトランクケースを右手にもつた、威圧感ある中年紳士がヤドリギとともに扉の鐘を力ランツと鳴らして、店のカウンターの左席にすわった。二人はバーテンにハイボールを頼み、何やらボソボソと喋りはじめた。紳士はジジ亭の主に「毎日ブルトン新聞」のある記事を声にだして読んだ。

『ボニーからロードへ、正義の鐘は誰がために鳴る』

愛するブルターニュの民衆よ。

新しい王は我らの敵、世を欺く者だ。

黒伯爵、黒子爵、黒男爵は諸君の仲間だ。

私は眞実のために、正義を貫く。

悪を打ち碎くための聖なる力は、
旅立ちの都に懐かしき友とともにある。
我とわが友よ、ロアゾンとともにあれ。

ヤドリギは困惑した表情で紳士に聞いた。

「捜査官殿、このちんぶんかんな記事がどうかしたですかい？」

「これはサンチョ・ボブスリーの部屋にあつた紙切れだ」

「のちんぶんかんぶんな記事は、今ブルトンの世を騒がしているあの脱獄囚のものだ。脱獄不可能の孤島の大監獄モン・サン・ミシエルからの脱獄に成功した、死刑囚サンチョ・ボブスリー。『迷いの森の特別捜査官』たちが夜通しで彼を追つているなか、男は見事に今も逃げきつていた。結果、先ほど公爵の勅命によつて当局より賞金がかけられたとのことだ。

「変装しているようだが、すでに田星はつこっている」

長年培われた捜査官の感といつものだらうか、さすがだ。

「どうしてヤツがカンペールにいると？」

「私の田は節穴ではない」

「…先ほどすれ違つた男がそつとでも？」

ヤドリギはまわりをみまわし、さらに捜査官に小声で訊いた。

「パパティーノにそう聞けといわれたのか？」

鋭い、さすが『迷いの森の特別捜査主任』だけはある。その男の名がでると、ジジ亭の亭主は黙りこくつた。

「…………」

何も喋らない。まるで巨顔石像のようだ。山荒しの主人は一人のまえに、ハイボールを置くと蓄音機に手をかけた。微妙な間を音楽でごまかすかのようだ。

「サンチョ・ボブスリーは二ト夫妻暗殺の主犯格だ」と迷いの森の捜査官。脱獄囚に同情の余地はない。もはや生かすも殺すも軍警察の管轄内にいる。賞金首になつた今、奴に命の保証はなく九年前の仇討ちにはもつてこいだ、と唸る。

「賞金を賭けてくださつた公爵陛下に感謝しなきやならんな、アイツは殺されても文句はいえない…」

ホワイト次官は冷たい眼差しで冷笑した。

「で、殺つちまうんですかい？」

異様な殺氣、血生臭さというべきものを感じたらしい。

ホワイト次官には、軍警察捜査員としての守秘義務がある。

株式会社である非公式な政府「ブルトン政府」に、警察はおろか軍隊はしない。だがそれに準ずる組織はある。それが軍警察だ。軍警察とは警察と軍隊の組織を合わせもつ、ブルトン政府唯一の武装組織なのだが、フランス国内マフィアでは彼らの立ち位置はただの警備組織にすぎない。悪くいえば秘密結社ともいえる。

ブルターニュ地方において、この警備組織は絶対であり、フランス政府も黙認しているのが現状だ。なんせ軍警察は魔法が使えるだけでなく、ブルターニュ地方の治安権限を彼らに委譲することで、フランス政府の国庫には公爵家から毎年莫大な委託金がはいる。さらに委託業務によって人件費などを抑えることができ、フランス政府にとつて、いい意味での鴨なのだ。

貴族たちによって組織された「軍警察」は、ブルトン公爵家の勅命のみに従つ。ゆえに公爵家への忠誠心は並々ならぬものがある。迷いの森の特別捜査官といつのは、特に極悪事件を担う精銳中の精銳をかけ集めた軍警察のエリート部門である。ホワイト氏はそのNO2なのだ。

その一種のエリートであるホワイト次官の容姿といえば、年はエングチヨと同じぐらいか。獲物を狩る獅子のような目が特徴だ。肌を青白く鼻は高い。頭髪は金髪に白髪交じり。髪型はオールバックだ、香料のポマードが鼻にツンとくる。とても姿勢がよくエンガチヨよりも背は低いものの、いかにも運動神経は彼よりもすぐれているだろう。誇りの高そうな威嚇をした歩き方をする。

型押しのフロックコートに灰色のビジネススーツ。左手には機械仕掛けのダイヤが埋め込まれた腕時計をしている。靴とベルトは蛇革だ。プラチナ製のベルトのバックルとカフス、ボタンそしてネクタ

イピンの装飾は、バッファローをかたどつたものだ。そして例の重たそうな鋼鉄のトランクケース。近寄りがたい何かを感じる。

「酒の肴にすぎん、忘れる」ホワイトはハイボールをほどよく飲んだ。

また再びカウンターのゴシック電話がジリリリーン、とやかましい音をたてる。

あの魔女ダ・カーポからの電話とあって、ニコレット氏はホワイトのほうをチラリッ。捜査官次官はめんじくさそうに「あの魔女のヒステリー声は耳が痛くてかなわん」と、町一番の変わり者の声を聞くためにカウンター席をたつた。

考古学者は先ほど、大祖父トモロヲ・ブドリから伝言を預かったという。その伝言の内容が信じられない内容だったので、ホワイト捜査官は彼女の言葉を四回目も聞き直してしまったほどだ。

「もしもしホワイト次官、知っていますの？」

「何も知りたくないね」男はぶつきらぼうにじつた。

人が他人を嫌つて、その存在を認めたくないとき、その存在を見る人の瞳というものは恐ろしいほど冷たくなる。それはブルトン人も変わらない。だけどこの世に生まれて独りぼっちということは絶対にない。

「もうすぐ十三歳よ、もしもし聞いていますの？」と魔女。

「フンッ、それがどうした？」

冷たく受け答えをするホワイト捜査官。

「あの子もブルトンの社交界を知つてもいい年頃よッ！」と魔女の声に不満が燻る。

返答に困るホワイト次官は、飲みかけのグラスに目をやつた。

思えば九年前、サンチョ・ボブスリーに殺された、ナオキ・二ト夫妻は自分のかけがえのない親友の一人だった。氏は親友として少

女のその後を見届ける義務がある。これは夫婦の遺言に近い頼みなのだ。

二ト夫妻が殺されたあと、その遺児ナオミはトモロヲ・ブドリによって保護された。その後の彼女の消息は不明だった。何年間たつてもホワイト次官の上司トモロヲ・ブドリは、捜査官にナオミの居場所を何も教えなかつた。ホワイト捜査官がナオミのことを知つたのは、つい数時間前のことだ。

トモロヲ・ブドリから彼女がカンペールのジジ亭でヤドリギ夫妻のもとで働いていると聞いたとき、ナオミはこれからもずっとフランス人として、これからも生きていくのだろう。これがあの人意志だと自分はふんだんという。

「アッパー・タウンには、あの子を迎えてくれる仲間がいますわ、もしもし」と魔女ダカーポ。

あの子がブルトン人にもどるのが正しいのか、間違つているのか、おそらくその答えはアッパー・タウンにあるのだろう。ナオミがアッパー・タウンに行こうが行くまいが、自分はサンチョ逮捕に全力を尽くすだけだ、それがわが友への弔いだ。と男は冷静に言葉を選ぶ。

「あの子の未来は、運命の女神が決めることだ」

捜査官は勢いよく魔女からの電話をきつた。意味深な言葉だ。

カウンター席に腹立だしそうにもどるや、男は運命の女神とやらの板挟みを呪うように店一番の度数が高いブランデーを頼み、直で喉に流しいれた。その仕草は喉を潤すというよりもやけ酒といったほうがよい。大人はときにはそういうことを仕出かす生き物だ。原点は子ども時代の一氣飲みだろう。誰が教えたのか、きっと酒の神バッカスなのかもしれない。

耳を澄ませばサンコランタン教会の鐘の音が聞こえてくる。

午後八時を過ぎたカンペールの町は冷氣のヴェールに包まれてい

る。「山荒し」の窓には、ちらちらと粉雪が舞い降りてきた。この降り方だと明日は黒瓦のトタン屋根に積もった雪下ろしが大変だろう。足元に寒さを感じたニコレット氏は、薪ストーブの火力を静かに強めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5367v/>

ブルトンの騎士候補生

2011年11月23日15時47分発行